夢の降る島シリーズ
夢見の島の眠れる女神
つごもり　むつき
津籠　睦月
【上巻】

はじめに

この電子書

「言ノ葉ノ

序章　忘れられた創世神話

　それは途方もない歴史の果てに、語り継ぐ者も途絶えてしまった遠い過去の出来事。
世界の創り手が未だ人類と共に暮らしていた時代の、忘れられた最後の記録だ。
「もう、行ってしまわれるのですか？」
　粗末な皮衣に身を包んだ少女が問う。彼は振り向き、頷いた。
「私の正体が露見してしまった以上、もうここにはいられない。君も見ただろう？私が何者かを知った途端、誰もが手前勝手な望みを押しつけだした。無論、それを責めるつもりはない。人類とはそういうものだと何より私自身が知っているからな。だが、偶然に出会ったということを理由にこの集落の人間だけを特別扱いすることはできない。願いを叶えてやれないと知りながら彼らと共に在り続けるのは私にも辛いことなのだよ。もう、この先こうして人間と交わることもないだろう。さらばだ」
「お待ち下さい！」
　少女は必死に呼びとめた。
「この先もう人類と関わるつもりが無いと仰るなら、どうかその前に一つだけ、願いをお聞き届け下さい！」
　その言葉に彼の表情が険しくなる。
「君も私に望むのか。私の言葉を聞いたにも関わらず。一体何を望むと言うのだ？」
「希望を」
　少女は彼の厳しい目にも臆することなく、はっきりと答えた。
「あなたのお創りになったこの世界は、生きる者にとってあまりに苛酷です。心無き獣ならともかく、感情も知性も与えられた我々にはとても耐えられません。どうか、せめて我らに希望を与えて下さい。この世を生き抜く支えとなる一欠片の希望を……」
　彼はしばし沈黙した。噛みしめるように少女の願いを頭の中で巡らせた後、彼は静かに告げた。
「では、お前たちに世界をもう一つ贈ろう」

第１章　夢の降る島

　灯台の二階にあるその部屋には、一年を通じて夏風が吹き込んでくる。窓辺に吊るしたウィンドチャイムが白い日差しを反射させながら、きらきらした音を奏でていた。

　風が運んでくる海の匂いに包まれながら、フィグはベッドに身をもたせ耳を澄ませている。頭に被った大きなヘッドフォンからは鉱石ラヂヲの微かな音が聞えてきていた。

『昼の白い月が世界樹の切株（ユグドラシル・スタンプ）の左肩にかかる頃、

影追いの森の奥、苺ロウソクの野（ストロベリーキャンドルフィールド）に夢雪（レネジュム）が降るでしょう』

　潮騒のようなノイズの合間、まるで歌うように響くのは、赤子をあやす母のように優しく美しい声。この島のどこかで眠っているという夢見の女神（レグナリア・レヴァリム）の睡語だ。

　フィグは目を開け、机に向かう。便せんを一枚取り出し、ペンで何かを書きつけると、彼はそれを丁寧に折り始めた。

　でき上がったのは、先の鋭く尖った紙ヒコーキ。フィグは窓辺に立ち、空を見上げて言葉を放つ。

「花曇りの都のレグナース、ラウラ・フラウラの元へ」

　言葉と同時に右手から放たれた白い紙ヒコーキは、すい、と風に乗り、まるで予め用意された見えないレールの上を滑るかのように島の中心へ向かい飛んでいった。

　見えなくなるまで見送って、フィグは階段を下りる。

「あら、フィグ。出掛けるの？」

「ああ。ちょっと苺ロウソクの野まで夢雪を集めに行ってくる」

　母親の声にそう答え、フィグはイスに引っかけてあったカバンと壁に立てかけてあったデッキブラシを手に取り灯台を出た。

　岬から島の中心へ向けて伸びる道には、いくつもの白い風車が、からからと音を立て回っている。その向こうには一面のひまわり畑。季節が変わることのないこの夏風岬では一年を通し当たり前に見られる光景だ。

　暑いほどに照りつけていた日差しは道を行くにつれ徐々に弱まり、森の入口にたどり着く頃には初夏のそれに変わっていた。

　森に入ろうとしたフィグの頭に、ふいにこつん、と軽いものがぶつかって落ちた。それはどこか丸みを帯びた形のピンク色の紙ヒコーキ。フィグはためらいなくその紙ヒコーキを広げた。

　広げた紙には、やはりどこか丸みを帯びた字でこう書かれていた。

『フィグへ。

　　わかった！すぐ行くね。今度は負けないから！

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ラウラより』

　フィグは軽くため息をつき、たたんだその手紙をポケットにしまった。
「あいかわらず下手クソな字……。こんなんで本当に夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）になる気かよ」
　頭を掻きながら森へと足を踏み入れる。
　そこは昼とは思えぬ暗闇の世界だった。茂り合い絡み合う木々の枝が空を完全に覆い隠し、わずかの日光さえも射し込まぬようにしている。だが、そんな暗闇を照らすように、ところどころに光が点っていた。それは木々の枝で白く発光しながら咲き乱れる花々と、淡いライムグリーンの光を放ちながら宙を舞う蝶の群れ。
　たくさんの光源に照らされて、フィグの足下にはいくつもの影ができては消える。揺らめく影たちを追いかけるようにして進む森――これが影追いの森という名の所以である。
　森を抜けると、そこは一面に苺の実を敷きつめたかのような赤い野原だった。ロウソクに点る炎のような形で揺れるそれは、花穂。苺ロウソクの野（ストロベリーキャンドルフィールド）と呼ばれるその野原には、既に一人先客がいた。極彩色の刺繍にふちどられた純白のローブを身にまとい、ふわふわした長い髪を苺の形の髪留めでとめたその人物は、フィグの姿を見ると不敵に微笑んだ。「フィグってばおっそーい！都から来た私の方が早く着いてるってどういうことよ!?」
　フィグはムッとして言い返す。
「俺はちゃんと最短ルートを通ってきた。お前が早過ぎなんだ。どうせまた俺を驚かすために無茶な方法で先回りして来たんだろう？ローブの裾が汚れてるぞ、ラウラ」
「えっ!?嘘っ！どこどこ!?まずいよ。またシスターに怒られちゃうっ！」
「自業自得だ。全く、もう十四だろう。そろそろ小女神宮（レグナスコラ）も卒業だってのに落ち着きのない……」
　そのまま説教を始めそうなフィグに、ラウラは「しまった」という顔で目をうろうろさせる。その時、ラウラの視界にあるものが映った。
「あーっ！」
　ラウラの叫びに、フィグはぎょっとしてその視線を追う。そこには島の中央にそびえる巨大な山の姿があった。頂を常に白い雲に覆われたその茶色い岩山は、その外観がまるで巨木の切株のように見えることから世界樹の切株（ユグドラシル・スタンプ）の名で呼ばれている。今、その山頂を覆う雲からひとかたまりの雲が分かれ、翼の生えた船の形に変化してこちらへ飛んでこようとしていた。
「もう女神の雲船ができてる！早く準備しなきゃ！」
　言いながらラウラは前髪をとめていた髪留めをはずす。それは瞬く間にラウラの身の丈の半分はあろうかという長さの杖に変化した。杖の先が丸

く湾曲した独特の形状のそれは、まるで柄の先に苺の形の飾りのついた一本の巨大な銀の匙に見えた。この島でレグナースとして生を享けた者のみに贈られる銀の匙杖（シルヴァースプーンワンド）だ。
　これからその巨大なスプーンで何かをすくおうとでもするように杖を構え、ラウラはフィグを見つめる。
「ルールは前と同じでいいよね？お題はどうする？」
　フィグもカバンを地に置き、デッキブラシを構える。
「じゃあ今回は『世界の幻獣』ってことで」
　山から飛んできた船型の雲が見る間に二人の頭上を覆う。そしてそこから砂糖粒のようにきらきら輝く白銀の雪が無数に降り始めた。
「じゃあ、しりとり夢術合戦・古今東西世界の幻獣スタートだ。まずは俺から」
　次々と舞い降りてくる雪は、タンポポの綿毛のようにふわふわと宙に遊ぶ。フィグが空中でデッキブラシを一閃させると、それは磁石で引きつけられたかのようにブラシの先に集まってきた。フィグはそのまま鋭く言葉を発する。
「夢より紡ぎ出されよ！スノッリのエッダよりフェンリル！」
　瞬間、白銀の光が弾けた。ブラシの先にかき集められた雪の粒たちが、光を放ち、融合し、形を変えていく。やがてそれは、四肢に足枷、全身にリボンのように細い不思議な素材の鎖を絡みつかせた一匹の狼の姿となった。しゃらしゃらと鎖の音を響かせながら野を駆け回るフェンリルの姿にラウラは「おぉー」と感嘆の声を上げ拍手する。
「さすがフィグ！すごくリアルな夢晶体（レクリュスタルム）だね」
　この島には、女神の夢見の力が溶け込んだ目には見えぬ細かな粒夢粒子（レフロゥム）を含んだ雪が降る。
夢雪（レネジュム）と呼ばれるその雪は島の人間の夢見る力に反応し、形を変える。人々は己の夢を具現化させるその技を夢術と呼び、夢術により紡ぎ出したものを、夢粒子の結晶夢晶体（レクリュスタルム）と呼んでいた。
「感心してる場合か。次はお前の番だぞ」
「そうだった。んー……。フェンリルか……。ル、ル……。よし！決めた！」
　ラウラは地に降り積もった夢雪にスプーン状の杖の先端を差し込み、すくうように持ち上げた。
「夢より紡ぎ出されよ！アラビアンナイトよりルフ鳥！」
　先ほどと同じように、杖の先で光が弾ける。それは宙に舞う他の雪片をも巻き込みながら大きくなっていき、そのまま空高く飛び上がった。
　現れたのは、両翼の長さが十五メートルはあろうかという巨鳥。象でも持ち上げられそうな太い脚はウロコで覆われ、そこだけ見るとまるで恐竜の脚のようにさえ見える。体だけ見れば恐ろしい怪鳥。しかし、その首の

上についた顔は……
「お前……っ、なんだあの鳥の顔はっ！何で象をも喰い殺す怪鳥があんなつぶらな瞳をしてるんだ。どこの文鳥だあれはっ！ルフは鷲に似た猛禽類のはずだぞ！」「えー？だってカワイイ方がいいじゃない。恐い顔の鳥さんなんて私、想像できないし」
「……何のための練習だと思ってるんだ、全く。まあいい。ちゃっちゃと次行くぞ。夢より紡ぎ出されよ！パラケルスス著『妖精の書』より波の下にいる者（ウンディーネ）」
「ウンディーネ……。ネ、ネ……。夢より紡ぎ出されよ！鳥山石燕『画図百鬼夜行』より猫また！」
「じゃあ、同じく鳥山石燕の『今昔百鬼拾遺』より滝霊王」
　フィグが猫またが完全に紡ぎ出されるより早く言葉を繰り出すと、ラウラは途端にうろたえ、焦ったように杖を振り回した。
「う!?えっと……えっと……夢より紡ぎ出されよ、ウンディーネ！」
　ラウラの出現させたどことなく幼げなウンディーネのそばに、フィグの出現させていた妖艶なウンディーネが、仲間を見つけたとでも言いたげに嬉しそうに近寄っていく。ラウラはハッとしたようにそれを見た後、がくりとうなだれた。
「そうだった……。ウンディーネはもう出ちゃってたんだっけ……」
「ばーか。こっちにつられてペースを崩すからそういうことになるんだ。今回で何敗目だ？ラウラ」
「うー……っ、次は負けないもん！もう一回勝負しようよ！」
「……いや、今日はもう無理そうだぞ」
　フィグはそう言って空を仰ぐ。頭上に浮かんでいた女神の雲船は、いつの間にか見る影もなく小さくすぼみ、そこから降る雪も見えるか見えないかほどの小降りになっていた。
「えぇ!?まだ一時間も経ってないのに!?最近夢雪やむの早くない!?」
「俺に文句を言われても何もできんが、確かに早いな。昔は一日中降っていたこともあったのに……」
　フィグは地に積もっていた雪をデッキブラシで掻き集め、カバンから取り出した虹色に透き通った小瓶に詰めだした。ラウラも杖の先で雪をすくい、それを手伝う。やがて雲船は完全に姿を消し、それと同時に野に積もっていた雪やフィグとラウラの紡ぎ出した幻獣たちも陽の光に溶けるように消えた。だがフィグが小瓶に詰めた雪だけは溶けずにふわふわと瓶の中で揺れ動き続けている。
　フィグは小瓶の蓋をそっと開け、中身をデッキブラシ全体にまんべんなく振りかけた。
「夢より紡ぎ出されよ。千夜一夜物語より魔法の木馬」
　言いながらデッキブラシから手を放すと、ブラシは白銀に輝きながら形を変え、金細工や宝石をちりばめた黒い木馬へと変化した。

「花曇りの都まで送る。乗れよ」
「うん。ありがとう。……ゆっくりでいいからね」
　二人を乗せた木馬は音もなく宙に浮き上がり、ラウラの希望通りゆっくりと走り出した。
　影追いの森をフィグが入ってきたのとは逆方向へと抜けると、そこは花歌の園だった。チューリップによく似た形の花が咲き乱れるそこでは、吹く風の音が他所とは違っている。何かを囁くような音で吹くその風が花弁を揺らすと、花たちは一斉に歌を歌い出す。それは囁くように小さな、しかし一つ一つが重なり合って花園中に響き渡る、ひどく耳に心地良い合唱だった。
「この歌、小さい頃の思い出を歌った歌だね。今日の歌伝風はどこの国から吹いてきたのかな」
　フィグの背に額を預け、ラウラが囁く。
「記憶の森で聴いた覚えがある。確か日本あたりの歌で『思い出のアルバム』とかいう名前の歌だったような気がするが」
「この歌の『イチネンセイ』ってさ、この島で言う小女神宮の一年目と同じことだよね？フィグは覚えてる？私が小女神宮に上がる前のこと」
「……忘れるものか」
　フィグの呟きはラウラの耳には届かなかった。
　花歌の園を抜けると、鮮やかな色彩を保ったまま風化した花びらたちにより生み出された葬花砂漠が現れる。この砂漠のちょうど中央に位置するオアシスが、この島の中枢であり、ラウラの暮らす花曇りの都だ。都は常に淡い黄色や薄紅色をした花雲に覆われ、そこからはいつも雲と同じ色をした花びらが降っている。葬花砂漠の砂は全て、この都の花びらが風に乗り外へ運ばれてできたものだ。
「じゃあ、ここで」
　都の外で木馬を降り、ラウラはフィグに手を振る。フィグは都の中へは一緒に行けない。都に入ることを許されているのは小女神宮の関係者と、特別に許可をもらった者だけなのだ。
　都へ向かい走り出す小さな背中を、フィグは見えなくなるまでその場で見送った。ラウラは一度も振り返らなかった。

第２章　君の生まれた日の夢

　フィグが夏風岬の灯台に戻ると、母親は既に夕食の支度を始めていた。
「夢雪（レネジュム）を集めるだけにしては遅かったのね。どこか寄り道してたの？」
「ああ。まあ……あちこち、な」
「あんた、まさかとは思うけど、未だにラウラ様と会ってるわけじゃないでしょうね」
　フィグはぎくりとして母親の背中を見つめる。
「分かってるでしょうけどね、いくら幼なじみだからってレグナースとみだりに会ったりしちゃダメよ。レグナースは小女神宮（レグナスコラ）を卒業するまでは恋愛御法度なんですからね。万一のことにでもなったらフラウラさんとこの奥さんと旦那さんに顔向けできなくなっちゃうわ」
　夏風岬にはフィグの家族であるフィーガ家を含め二世帯しか住んでいない。そのもう一世帯がラウラの生れたフラウラ家だった。フィグとラウラは、ラウラが六才になり小女神宮（レグナスコラ）に上がるまでお互いだけを唯一の遊び相手に過ごしてきた。
「……分かってるよ。小女神宮（レグナスコラ）を出てただの女になるまでは手を触れちゃダメだって言うんだろ？もう何回聞かされてると思ってるんだ、その話」
「『ただの女』？失礼ね！大人の女性と言いなさい！だいたい母親に向かってその態度は何なの？母さんだって昔はレグナースだったんですからね！」
「島の女は皆そうだろ。男に生れなきゃ皆レグナースなんだから」
　この島には“女の子”が存在しない。否、正確に言うなら“女の子”という概念が存在しない。この島に生れた男でない子どもは、初潮を迎え女となるまでは皆、女神の代理人である“小女神（レグナース）”とみなされ、都の小女神宮（レグナスコラ）に集められ、シスターたちの手により大切に養育される。
　それまで他の子どもたちと接する機会の無かったフィグがそれを知ったのは、ラウラが六才になった時のことだった。当時、まだ何も理解できず、小女神宮（レグナスコラ）からの迎えにラウラが得体の知れない集団に連れて行かれると思い込んだフィグは、駆け落ちまがいのことをしてラウラを岬から連れ出した。フィグが七才の時のことである。
　幼い逃亡劇は結局失敗に終わったが、おてんばで好奇心旺盛なラウラはすぐに都を抜け出す方法を覚え、こっそりフィグに会いに来るようになった。以来、二人の逢瀬は今日まで続いている。

　自室に戻ると、机の上にはいつの間にか水色の紙ヒコーキが届いていた。

ラウラが岬を出た後に交流を持つようになった“黄金紅葉（こがねもみじ）の郷（さと）”の同年代の友人の手紙だ。

『フィグ・フィーガへ
　明日、夢鉱石（むこうせき）を採りに行こう。リモンとカリュオンも一緒だ。
　時告鳥（ときつげどり）が十鳴く頃に、鉱石谷（こうせきだに）の入口で待ってる。
ビルネ・ビネガー』

　返事の紙ヒコーキを空へ飛ばし、フィグはふと思いついたようにもう一枚便せんを取り出した。

『ラウラへ。
　今日お前が紡ぎ出した夢晶体（レクリュスタルム）は、どれも原典とはかけ離れた出来だったぞ。もう少し記憶の森で勉強してイメージ修行を積んだ方がいいんじゃないのか？
　夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）選考会までもうそんなに日がないんだろう？
フィグ』

　傾き始めた太陽へ向け、紙ヒコーキを勢いよく飛ばす。紙ヒコーキは空に吸い込まれ、あっという間に見えなくなった。

　その夜、フィグは夢を見た。フィグはまだ生まれて一年経つか経たないかくらいの幼い子どもで、子ども用のベッドですやすやと眠っていた。そのそばに、ふいに一人の老人が煙のように現れた。
「ほぉ。よく眠っておるのぉ。良い子じゃ」
　言いながら老人はいつの間にかその手に持っていた赤い縄を幼いフィグの足首に結ぼうとする。フィグはぎょっとして叫んだ。
「おい待て！あんた、俺に何する気だ!?」
「ほぉ。起きておったのか。……いや、お前さんはこの子であってこの子ではないのぉ。未来（さき）の世から魂だけここに来ておるのか」
「何を言ってるんだ。あんた誰だ？」
「わしは月下老人（ユエシアラオレン）。人の世の縁を司る神じゃよ。今日はな、お前さんにこの“紅線（ホンシェン）”を結びに来たんじゃ。ちょうど今日、お前さんにとっての運命の相手がこの世に生まれ出でるのでな」
　そう言い、老人は有無を言わせずフィグの足首に赤い縄を巻きつける。

太い縄に肌を擦られる痛みに、フィグは小さく悲鳴をあげた。
「ちょっと待て！なんで足に縄なんだよ!?運命の相手との間に結ばれるものと言ったら、小指と小指の間の赤い糸じゃないのか!?」
「ほっほっほ。それは後の世に加えられた脚色じゃ。確かに足首を縛る縄より小指に絡みついた糸の方がロマンティックじゃからのぅ。しかし、すぐに切れてしまいそうなか細い糸より、どんなに引っ張っても切れぬ太い縄の方が安心じゃろう？」
「それはそうかもしれないけど……っ！ちょ……っ痛いって！そんなに締めるなって！」
「ほっほっほ。駄目じゃ。決してほどけぬようにきつーく結んでおかねばならんからのぅ。人の縁とはそういうものじゃて。一度定められた運命の相手との縁は、切ろうと思ったとて糸のように簡単には切れぬ。縁とは甘く美しいだけのものではない。互いを縛る縄でもあるのじゃ。それをよく覚えておくが良いぞ」
　老人は縄の片端をフィグの足首に結び終えると、もう片方の端を持って窓から出て行こうとする。
「待て。あんた、その縄を誰に結ぶ気だ？」
「ほぅ。知りたいのか？己の運命の相手を」
　笑いながら、しかし妙に鋭い目で問い返され、フィグは一瞬言葉につまった。
「……知りたいさ。だって、どうせこれは夢なんだろう？だったらオチも見ずに目覚められるかよ」
「ほっほっ。夢、のぅ。確かにお前さんにとっては夢じゃろうが……お前さん、この島における “夢” がどういう意味を持つものなのか、まだ分かっておらぬようじゃの。まぁ良かろう。知りたいと言うなら連れて行こう。ほれ」
「うわっ!?」
　老人に腕を引かれた途端、フィグは魂だけの存在となり、幼い自分の肉体から引っ張り出された。老人はうろたえるフィグにはかまわず、飄々とした足どりで宙を歩いていく。フィグはクロールの要領で空を掻くようにしてあたふたとその後をついていった。
　灯台の外は夜の闇に包まれていた。月のない夜だ。だが妙に星の美しい夜だった。
　満天の銀の星あかりを頼りに進む先に、柔らかなオレンジ色の光が点っている。それは岬を望む丘に建つ、赤い屋根に白い壁の小さな家から洩れる灯りだ。フィグは軽く目を見開いた。
「ほれ、あの家じゃ。煙突の上にコウノトリがとまっておるじゃろう？たった今赤子の魂を運び終え、今は翼を休めておるところじゃ」
　家の中からは微かに赤ん坊の泣き声が聞こえてきていた。フィグは無言で窓に近づき、室内をのぞき込む。

「生れたぞ！小女神（レグナース）だ！ああ……なんて可愛い子なんだ」
　白いおくるみに包まれ、男の腕に抱かれたその赤ん坊が誰なのか、フィグには一目で分かっていた。
「……ラウラ」
「さて、と。では仕事を済ませてくるとするかな」
　老人は壁をすり抜け赤子のラウラに歩み寄っていく。そしてどうやったのか、おくるみに包まれたラウラの小さな足首に赤い縄の片端を結ぶと、ひょこひょことフィグの隣に戻ってきた。
「ほぅ？言葉も出ぬほど驚いておるのか？己の運命の相手に」
「逆だよ。あまりにも意外性がなくて呆れてるんだ」
「呆れておる、のぅ。わしにはホッとしておるように見えるがのぅ」
「冗談じゃない。俺がラウラと何年一緒にいると思ってるんだよ。くされ縁過ぎて、今さらときめきも新鮮味も感じられるわけがない」
「ほっほっ。まだまだ若いのぅ。今までずっと同じ関係だったからと言って、これからもそうだとは限るまい？」
　そう言ってからかうように笑った後、ふっと老人は真顔になった。
「そう。紅線（ホンシェン）でつながれておるからと安心していてはいかんぞ。この世の中に変わらぬものなど無いのじゃからな。運命でつながれた唯一無二の相手を失ってしまうと、それはそれは深い絶望を味わうことになるでな」

第３章　夢鉱石の谷

　空は青く澄んでいた。時告鳥が鐘の音に似た声で十回鳴いて飛び去っていく。頭上を横切るその銀色の鳥を、フィグは仏頂面で見送った。
「よう、フィグ！久しぶりだな」
「早いな。またお前が一番乗りか」
「どうしたんだよ。そんな不機嫌そうな顔して。嫌な夢でも見たのか？」
　背後からかけられた三つの声にフィグは振り返り、顔をしかめる。
「……なんだ、ソレは」
　フィグの視線の先には、三人の少年の乗る珍妙極まりない乗り物があった。
「これか！スゲーだろ！馬の代わりに魔法のホウキを使った“空飛ぶ馬車”……あ、違うか。“空飛ぶホウキ車”さ！」
「……俺の目には二本のホウキの後ろにリヤカーがくくりつけられてるだけの代物にしか見えないんだが。お前が紡ぎ出したのか？」
「そうさ。俺は既存の夢物語からしか夢晶体を紡ぎ出さないお前と違って自分のオリジナルで勝負する性質だからな！」
「いや、僕たちは止めようとしたんだけどリモンが聞かなくてさ……。ほら、リモンって夢術師（レマーギ）目指してるから」
「性能はともかく見た目がなぁ……。郷を出て来る時にも何人かに笑われたし」
　小声で言い訳じみたことを言い出すビルネとカリュオンを同情の目で見やり、フィグはわざとらしく大きなため息をついてみせた。
「まあ仕方ないだろう。オリジナルの夢晶体ってのは全部を自分で考えなければいけない分、既存の夢物語を形にするより高度なセンスと想像力が必要とされるからな」
「なんだ、その言い方。まるで俺にセンスと想像力が無いみたいじゃないか」
「まあまあ。こんな所でダラダラしてないでとっとと鉱石谷に入ろうぜ」
　三人が降りた途端、リモンの紡ぎ出した“空飛ぶホウキ車”は細かい光の粒子をまき散らしながら溶けるように消え去り、後には一本の雪かき用のシャベルがカランと音を立てて地に落ちた。
　鉱石谷は“世界樹の切株”を取り囲むドーナツ状の深い谷の一部だ。入口付近には切り出された夢鉱石（レム・ストーン）を加工する夢鉱技師（レマイスタ）たちの工房が建ち並び、その奥には一面に白い石の森が広がっている。大理石のような石でできた木々の群れは、ところどころで谷の岩壁と一体化しながら枝を伸ばし、その先に果実のように夢鉱石を実らせていた。
　四人は森に入るとすぐに別行動をとりだした。鉱石谷に実る夢鉱石は、実る木によりその色も形も異なっている。四人はそれぞれ目当ての夢鉱石

を探し出し、枝に登ってもぎ取ったり、下からパチンコで撃ち落したり、あるいは見つけた石を虫眼鏡で観察し、その質を見極めてから慎重に採取したりと、思い思いの方法で “収穫” していった。
　約一時間後、ポケットいっぱいに詰め込んだ夢鉱石を手に四人が向かったのは、夢鉱技師ハーメドの工房だった。
「おぅ。今日も来たか。今度は何が欲しいんだ？」
　白髪まじりの夢鉱技師は夢鉱石鑑定用のルーペを取り出しながら、にやりと笑った。四人は工房の棚に並ぶハーメドの作品の中から目当ての品を手に取り、きらきらした目でハーメドの元へ持っていく。
「千里眼鏡（セカンドサイト・テレスコープ）か。そいつは高いぞ。それなりの夢鉱石とじゃなけりゃ交換はできねぇな」
　フィグが手にしたそれは目盛りに碧の夢鉱石がついた双眼鏡だった。もちろん、ただの双眼鏡ではない。それは夢鉱石に含まれる “夢粒子（レフロウム）” の力を借りて、たとえどんなに遠く離れた場所であろうと、そして間にどんな障害物があろうと、その人の望むものを映してくれる双眼鏡なのだ。夢鉱技師とは夢鉱石を利用してこういった道具を生み出す職人のことを言う。
「あーっ！ずるいぞフィグ！それは俺も狙ってたんだ！」
　カリュオンが横から割り込みフィグの手にした千里眼鏡を奪い取る。
「だったらお前、今手にしてる鉱石ラヂヲはどうするんだよ？二つともは無理だろう」
「じゃあラヂヲはやめてこれだけにする！だったらいいだろ！」
「こらこら。人の店で勝手にケンカを始めるんじゃない。それじゃあ公平に、採ってきた夢鉱石の価値がより高い方にそいつを譲ろう」
　ハーメドは二人の採ってきた夢鉱石を机の上に並べさせ、鑑定を始めた。
「ふむ……。アベンチュリンクォーツが三つにムーンストーンが二つ、それとアマゾナイト、ロードナイト、アルマンディンに、ペリドットが一つずつか。随分採ってきたな。で、フィグの方はと……」
　フィグの採ってきた夢鉱石を横目で見て、カリュオンは勝利を確信したような笑みを浮かべた。
「なんだ、フィグ。全然採れてないじゃないか。カイヤナイトが一つにブルーレースアゲートが二つ、それと水晶一つだけか。悪いがこの千里眼鏡は俺のものだな」
「いや、今回はフィグの勝ちだ」
　鑑定を終えたハーメドがカリュオンの手の中の千里眼鏡をひょいと取ってフィグに渡す。
「何でだよ !? 数も石の大きさも俺の方が上じゃないか！」
「まあ、単純に石の数と大きさだけだったらお前さんの勝ちで良かったんだがな。より価値の高い方と言っただろう？夢鉱石の価値は大きさや種類だけで決まるものではない。色・形・傷の有無、そして何より含まれる夢粒子の量と質が重要なのだ。それにな、フィグの採ってきた水晶をよく見

てみろ。きれいなハート型をしているだろう？こいつは日本式双晶だ。鉱石谷でもそうそうは採れん希少価値の高い逸品だ。さすがは夢鉱技師志望なだけあって、なかなかの目利きだな」
　その言葉に、少年たちは一様に驚いた表情でフィグを振り返る。
「えっ？フィグって灯台守を継ぐんじゃないのかよ？」
「いやいや、俺はてっきり夢術師（レマーギ）になりたいんだと思ってたぞ。だって夢紡ぐの上手いじゃないか」
「そうだよ。リモンよりよっぽどセンスも想像力もあるのに、もったいない」
「……夢術師なんて、ほんの一握りの人間しかなれないじゃないか。夢を紡ぐ力なんて、ほとんどの人間は二十歳になる前に失ってしまうんだぞ。そんな、なれるかどうかも分からないもの目指すより、俺は手に職をつけたいんだよ」
　フィグの言葉に三人の友人たちは呆れたように顔を見合わせた。
「相変わらず、現実的って言うか、夢がないって言うか……」
「レヴァリム島の住人とは思えない台詞だよな」
　ムッとしたように黙り込むフィグにハーメドも苦笑する。
「そうだなぁ。やりたいことや創りたいものがあって夢鉱技師になりたいと言ってくれるんなら嬉しいんだがなぁ。お前さんは安定志向に走るにはまだ早過ぎるんじゃないか？若いうちには夢を見ておくものだぞ」
「夢……」
　呟くように繰り返すフィグの脳裏に幼い頃の自分の声が蘇る。
『いつか俺はこの島の外に出るんだ。ギリシャ神話やケルトの妖精や神仙の生まれた国を自分の足で巡ってみたい。ここよりもっと広い“果てのない”世界を旅するんだ！』
「夢なんて、実現可能なものじゃなきゃ意味ないさ」
　吐き出すように呟かれたその言葉は、どこか自分自身に言い聞かせているような響きを含んでいた。

「しかしハーメドさんも人使いが荒いよね。帰るついでにおつかいしていけなんてさ」
「そうそう。しかも記憶の森じゃ帰るついでどころか遠回りだってのに」
　記憶の森――それは島の“外”で生まれたあらゆる伝承や夢物語を記憶している森だ。折れ曲がり絡み合った木々の枝が天然の本棚を作り、そこに大量の書物や音楽盤を蓄え、まるで青空図書館とでも呼ぶべき光景を生み出している。
「で？その届け物ってのは一体何なんだ？夢鉱技師志望のフィグなら分か

るだろう？」
　フィグはハーメドに渡された回り灯籠のような形の装置に目を落したまま答える。
「夢幻灯機（ファンタレム・プロジェクタ）だ。好きな本の上にこれを載せて起動させると、本の中に描かれた風景や生き物が周りに映し出される」
「うへー、高価そう。でもなんでそれを記憶の森に届けるんだ？」
　カリュオンの疑問はほどなくして解けた。
「おい、ちょっと、あれ……小女神（レグナース）ご一行じゃないのか……？」
　リモンが信じられないといった面持ちで隣に座っていたビルネの肩を揺さぶる。
「ああ、うん。そうだね。今日はここで野外授業してるんだ……」
　記憶の森にいたのは、六才から十四才までの小女神（レグナース）たち五十数人と、その引率をしてきたと思しきシスター数人。小女神宮（レグナスコラ）という閉鎖空間に隔離されているため普段は姿を見ることさえできない自分と同年代の小女神（レグナース）の存在に、少年たちは興奮とも緊張ともつかぬものに襲われ硬直する。そこに一人の老シスターが歩み寄ってきた。
「小女神宮（レグナスコラ）・シスター長のアルメンドラです。あなた方がハーメド技師のおつかいでいらした方々ですか？」
「は、はいっ！」
　裏返った声でリモンが答えると、小女神（レグナース）の集団からくすくすと笑い声がこぼれた。
「なぁに、あの乗り物。二本のホウキの後ろにメタリックレッドのオープンカー？すっごく変」
　聞えてしまった囁きに、少年たちは赤面してうつむく。
「……だから言ったのに」
「何がだよ。リヤカーよりはカッコよくなってるだろ!?」
「リモンはそもそもセンスがおかしいんだって。どう考えたってホウキは要らないだろ」
「ホウキが無かったらただのスーパーカーになっちまうじゃんかよっ！」
　言い争う三人を無視し、フィグは預かってきた夢幻灯機をシスター長に手渡す。その時、シスター長の背後でラウラがこちらへ向け手を振っているのが見えた。
「ちょ……っ、ラウラっ、あんた何やってんの！男の子なんかに手ぇ振ってたら、またシスターに怒られるよっ」
　ラウラと同年代と思しき短髪の小女神（レグナース）があわててそれを止める。
「なんでダメなの？」
　ラウラがきょとんとした顔で問うと、そばで話を聞いていた黒髪の

小女神（レグナース）が小馬鹿にしたように笑った。

「相変わらず軽率なことだな。小女神（レグナース）は恋愛御法度というのを忘れたわけでもあるまいに」

「アメイシャ……その言い方は少しきついと思うわ」

　まるでフランス人形のような美しい容姿を持つ小女神（レグナース）が黒髪の小女神（レグナース）をたしなめる。小女神（レグナース）たちの集団の中ではおそらく一番年長であろうと思われるその四人の小女神（レグナース）に、いつの間にか他の少年たちの視線も釘付けになっていた。

　その時、まるでその視線を咎めるかのように大きな咳払いが聞こえた。少年たちは夢から覚めたようにハッと目の前のシスター長に視線を戻す。

「おつかいご苦労さまでした。それではお気をつけてお帰りなさい」

　まるで「さっさと帰れ」とばかりに平坦な声で告げられ、少年たちは気まずげな顔で森を後にする。

「……あー、でもマジで綺麗だったなー。特にあの黒髪の小女神（レグナース）。あの方がアメイシャ様だろ？夢術に関しては百年に一人の天才って言われてて “夢見の娘” 最有力候補の」

　森からだいぶ離れたところでやっとリモンが口を開く。

「えー？でも性格キツそうじゃなかったか？やっぱり俺はアプリ様派だね。アプリコット・アプフェル様。見た目だけならダントツ一番じゃん。いかにもお嬢様っぽくて、品があるし、綺麗だし」

「アーちゃ……じゃなくて、アプリ様は見た目だけじゃなくて性格も一番優しいよ。小女神宮に上がった頃までのことしか知らないけど、たぶん今も」

　それまでの沈黙が嘘のように少年たちは騒ぎ出す。その頬は皆、興奮で赤く染まっていた。

「おいフィグ、お前はどの小女神（レグナース）がいいんだよ？」

　ふいに話を振られ、フィグは一瞬反応できなかった。

「は？」

「『は？』じゃねぇよ。どうしたんだ？さっきから全然しゃべってないぞ。まさか小女神（レグナース）に本気で惚れて言葉も出ないんじゃないだろうな」

「……そんなんじゃねーよ」

「あ！そう言えば、あの手ぇ振ってた小女神（レグナース）、お前と出身地同じじゃなかったか？」

「……ああ。そうだが」

「確か、ラウラ様とか言ったっけ。あの小女神（レグナース）も可愛いよな。ちょっと幼げな感じはするけど」

「そうだよな。手ぇ振って怒られたりしちゃってさ。美人っていうより可

愛いって感じ。他の三人より親しみやすそうだしさ」
「は !? ラウラが可愛い !?」
　思いもよらなかった言葉を聞かされフィグは目を剥いた。
「可愛いじゃないか。なんかこう、フワフワした感じで」
「そうそう。いかにも小女神（レグナース）って感じでさ。見てると和みそうでいいよな」
「……どこがだよ。あんな破天荒で天然ボケで危なっかしい奴……」
　フィグはひとり言のように呟く。その顔は無意識にむくれたものへと変わっていたが、本人はそんな表情の変化にも、己の心の変化にもまるで気づいてはいなかった。

「夢より紡ぎ出されよ！長靴をはいた１０１匹の猫！」
　鋭いかけ声とともに、ラウラは泉の中に浸していた匙杖（スプーンワンド）の先端を勢いよく振り上げげた。泉の水が飛び散り、飛沫が白銀の光を発する。それは瞬く間に手のひらサイズの長靴をはいた猫の姿となり、ラウラの周りをうじゃうじゃと二足歩行で歩き出した。
「おぉー……。なかなかやるじゃん。スゴイスゴイ」
　感嘆の声とともに惜しみない拍手を送ってくるのは短髪の小女神（レグナース）。ラウラのルームメイトにして親友、キルシェ・キルクである。
　ここは小女神宮（レグナスコラ）の中庭にある“夢生みの泉”。世界樹の切株（ユグドラシル・スタンプ）に積もる雪が地下水脈を通り泉となって湧き出すこの水には夢粒子（レフロウム）が豊富に含まれている。
「でも１０１匹はちょっと多過ぎ。見てて気持ち悪いから消してくれない？」
「……はっきり言うなぁ、もう」
　ラウラはため息とともに意識の集中を解いた。途端、あれほど群がっていた小さな猫たちが幻のように消え去る。
「まさかあんた、ソレで夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）選考会に出ようってわけじゃないよね？」
「……ダメかな」
「ダメでしょう。相手はあのアメイシャとアプリと、ついでにこの私なんだよ？」
「うーん……。まあ、そうだよね。でも、そういうキルシェちゃんには何か良い策でもあるの？」
「策？無いよ、そんなの。だって私、優勝する気ないし」
「えぇーっ !?　何で !?　どうして !?　キルシェちゃんは夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）になりたくないの !?」
「そりゃなりたいけどさ。現実問題無理でしょ。アメイシャが相手じゃレベルが違い過ぎるもの」
　キルシェは自嘲するように笑う。
　――夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）。それは一年に一度島で行われる“夢追いの祭”の主役であり、基本的に小女神（レグナース）の最年長者たちの中から選ばれる。祭の当日には極上の衣裳を身にまとって島中をパレードし、周りからはまるで女神そのもののように扱われる。小女神（レグナース）に生まれた者であれば誰もが夢見る名誉ある役目なのだ。
「確かにメイシャちゃんはすごいけど、勝敗を決めるのは選考会当日の

夢晶体（レクリュスタルム）の出来でしょう？だったら私たちにだってチャンスはあるよ！審査官をアッと言わせる発想（アイディア）で逆転を狙えばいいんだもん」
　きらきらした目で力説するラウラをじっと見つめた後、キルシェは『あんたには負けるわ』とでも言いたげに破顔した。
「まあ、確かにそうだわ。どんなに可能性が低くても最初から諦めるもんじゃないよね。あんたのそのいつも前向きな所、本当にいいわ」
「そうだよ！『どうせダメ』なんて思っちゃダメだよ。少しでも諦めたらやる気（モチベーション）が下がって夢晶体（レクリュスタルム）の質（クオリティー）も落ちちゃうもん。だから、ここぞという勝負の時には成功した自分の姿を思い描いてやる気をみなぎらせておくの！」
「ありえない未来を思い描いてその夢に溺れるのは時間の無駄だと思うが？」
　盛り上がりかけた二人の気持ちに水を差すように冷たい声が響く。振り向くとアメイシャ・アメシスが紫の瞳でじっとこちらを見ていた。
「何、あんた。ケンカ売りに来たわけ？」
　立ち上がりにらみつけるキルシェにかまわず、アメイシャは無言で泉のそばに歩み寄り、左耳のイヤリングをはずした。先端に紫水晶（アメシスト）のついたそのイヤリングは、一瞬で銀の匙杖（シルヴァースプーンワンド）へと形を変える。
「これから私がここで練習をする。退いてくれないか？」
「何それ！後から来ておいて何様のつもり？夢生みの泉はあんた一人のものじゃないんだからね！」
「そう。私一人のものではないし、君たちだけのものでもない。夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）候補者の公平性を保つために、ここでの練習時間は一人一日３０分と決められていたはずだが？」
「何が公平よ！知ってるんだからね！あんたが故郷から瓶詰めの夢雪（レネジュム）を山ほど送ってもらってるの！」
「それが何か？私が言ったのはあくまでこの泉の使用時間のことだ。文句があるなら君たちも夢雪（レネジュム）を集めて来ればいいではないか」
　キルシェが目を吊り上げて反論しようとしたその時、回廊から一人の小女神（レグナース）が走り寄ってきた。豊かにウェーブする亜麻色の髪が特徴的なその小女神（レグナース）は、アプリコット・アプフェルだ。
「三人とも、またケンカしてるの !?」
「止めないでアプリ。アメイシャには社会生活における礼儀と常識ってやつを誰かが教えてやらないといけないのよ」
「礼儀はともかく、常識ならば私より先に君の親友に教えてやった方がいいのではないか？何せシスター・アルメンドラもお嘆きの“常識外れのカタマリ”だからな」

「ちょっとアメイシャ、言い過ぎよ」
　アプリコットがたしなめる。だが言われた本人は怒るどころか、褒め言葉でも聞いたかのようにニコニコしている。
「ラウラ、何笑ってんの。あんためちゃくちゃ馬鹿にされてんのよ？」
「え？だって常識に囚われないって大事なことでしょ？人をアッと言わせる発想は、先入観や常識から外れた自由な思考から生まれるって夢術師（レマーギ）の先生方も仰ってたし」
　ラウラの言葉に他の三人は一瞬無言になり、脱力したように吐息した。
「……話にならん。だから私は君が嫌いなんだ」
　アメイシャはラウラから目を逸らすと、そのまま無言で中庭を出ていった。アプリコットもその後を追うように立ち去る。泉には元通り、ラウラとキルシェの二人が残された。
「あんたって何だかよく分からないけどスゴイよね。あのアメイシャに勝っちゃうんだから」
「今の、勝ったって言えるのかなぁ？」
「うーん……。でも少なくとも負けてはいなかったよ。やっぱりあんたしかいないかな、アメイシャ相手に夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）を勝ち獲れる大穴がいるとしたら」
「えー？キルシャちゃんも目指すんでしょ？夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）」
「そりゃあ私もベストは尽くすよ。でも、負けるのがあんただとしたらきっと不満には思わない。むしろ見てみたいと思うよ。あんたの夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）姿」
　ふいにしんみりと言われ、ラウラは思わず瞳を潤ませた。
「キルシェちゃん……」
「でも、さっきの夢晶体（レクリュスタルム）を見る限りじゃ有り得ないけどね。あんた、趣味に走り過ぎ。審査官はかなりのベテラン夢術師（レマーギ）ばかりなのよ。動物出して『あ～カワイイ～』で良い評価をくれるわけないでしょ。もっと頭使って玄人受けの良さそうな小難しげな夢晶体（レクリュスタルム）を紡ぎ出さないと！」
　漂いかけたしんみりムードを自ら木端微塵に吹き飛ばし、キルシェはからからと笑う。ラウラはがくりと肩を落とした。
「キルシェちゃん、辛口過ぎ。おまけになんか、打算的だよ……」

　小女神宮（レグナスコラ）の夜は早い。六時の鐘が鳴る頃に食堂で全員そろっての祈りと食事を終えると、片付けや入浴、身支度を済ませ、八時の鐘が鳴る頃にはもう消灯時間となる。だが、まもなく大切な選考会を控えた最年長者たち

についてだけは、例外的に練習や準備のための夜更かしが許されていた。
　ラウラは鐘楼のバルコニーに一人立ち、銀の匙杖（シルヴァースプーンワンド）を構えていた。その目に映るのは花雲の合間からのぞく満月と、その光を浴びながらひろひろと宙を舞う白い花びら。ラウラは月の縁をなぞるように杖を振るった。
「夢より紡ぎ出されよ！“めくるめく四季”！」
　だが、それはほんのわずか花びらを揺らしただけで、後には何も起こらなかった。
「選考会へ向けてのイメージトレーニングですか。どうやら題材は決まったようですね」
　声をかけられ振り向くと、そこには乳青色（ミルキーブルー）の尼僧衣（シスターローブ）に身を包んだ二十代前半と思しき女性が一人、立っていた。
「シスター・フレーズ！」
　ラウラの顔がぱぁっと輝く。シスターはどこか儚げに微笑んだ。
「もしかして、私を待っていたのですか？」
「うん！だって、シスター・フレーズって昼間はなかなかつかまらないし。いつもみたいに夜に一人でここにいれば会えるかなって思って」
　ラウラが彼女と初めて会ったのは、小女神宮（レグナスコラ）に上がって間もない頃のことだった。両親や住み慣れた家から引き離され、今まで会ったこともなかった同年代の小女神（レグナース）たちの中に放り込まれたラウラは、すぐには環境に馴染むことができず、誰もいない小女神宮（レグナスコラ）の片隅で一人、泣いてばかりいた。そんな時に声を掛けてくれたのがシスター・フレーズだったのだ。

「何を泣いているのですか？家が恋しいのですか？」
　最初にそう声を掛けられた時、ラウラは一度頷いた後、急いでその首をふるふると横に振った。
「家にも帰りたいけど……泣いてたのはそのせいじゃなくて……フィグと会えないのが、悲しいの」
「フィグ？」
「おとなりの灯台の、男の子。小女神（レグナース）は男の子と会ったりしちゃダメなんだって、みんな言ってる。そんなの嫌だよ。ずっと一緒にいるって約束したのに、もう会えないなんて、そんなの、嫌……っ」
　嗚咽混じりに訴えるラウラの顔をしばらくじっと見つめ、シスター・フレーズはふいに悪戯っぽく微笑んだ。
「大丈夫。会えますよ。実は、この小女神宮（レグナスコラ）には外へと通じる秘密の抜け道がいくつかあるのです。コツさえ覚えれば、シスターの目を盗んで外へ

抜け出して、誰にも気づかれないうちにまた戻ってくることさえできるようになります」
　そのシスターらしからぬ台詞に、ラウラは自分が泣いていたことさえ忘れ、呆然と彼女の顔を見つめた。
「え？どうしてそんなこと教えてくれるの？お姉さん、シスターなのに」
「私はシスターである前に、全ての小女神（レグナース）の味方なのですよ。それに、小女神（レグナース）だから恋をしてはいけないなんて、そのような風潮、私は認めていません。純潔を守ることと、恋をすることとは全く別のこと。恋を知ってこそ得られるものもあるはずですから……」
　胸の前で両手を組み、静かに語る彼女の声には、まるで自分の経験を語ってでもいるかのような不思議な実感が籠もっていた。だが当時のラウラにはそんなことに気づく余裕も、彼女の話を理解するだけの能力もなく、ただきょとんと首を傾げるばかりだった。
「……あなたには、まだ難しい話でしたね。けれど、そのうちにきっと分かります。ですから、その男の子に対する想いを、失くさずに大切にしていってください。その想いがあなたにどんな成長をもたらすのか、楽しみに見守らせてもらいますから」
　こうして始まったふたりの交流は、今もこうして、誰にも見咎められることのない夜の小女神宮（レグナスコラ）の片隅で続けられているのだ。

「どうしてかな、シスター・フレーズって、私が悩んだり迷ったりしてると、いつも今みたいに来てくれるよね。まるで私の考えてることが全部分かってるみたいに」
　ラウラが笑って言うと、シスター・フレーズは何故か、やや困ったような顔で微笑んだ。
「分かっていますよ。私は小女神宮（レグナスコラ）の全ての小女神（レグナース）を見守るために、ここにいるのですから」
「そっか。えへへ。なんか嬉しいな」
「……また何か、迷っていることがあるのですね？」
「うん。選考会の題材のことで、ちょっと……」
「先に言っておきますが、選考基準など、選考会の詳細に関わるアドバイスはできませんよ。他の小女神（レグナース）に対して悪いですから」
「うん。分かってる。いいよ。話を聞いてくれるだけで。だってシスター・フレーズって、一緒に話してるだけで心が落ち着くんだもん」
　ラウラは銀の匙杖（シルヴァースプーンワンド）をぎゅっと握り直し、ぽつりぽつりと話し始めた。

「あのね、さっき練習してた“めくるめく四季”って、私が今まで出会った景色の中で、感動したもの、綺麗だと思ったもの、好きなものを集めて、春夏秋冬の順番に並べたものなんだ。キルシェちゃんも褒めてくれたし、私も最初に思いついた時には『イケる』って思ったんだけど……なんだか、何かが足りない気がして」

　シスター・フレーズは何も言わず、ただ静かな目でラウラの言葉を待つ。

「上手く言えないし、自分でもよく分からないんだ。でも、何か違う気がして、モヤモヤするんだ。私が皆に見てもらいたいのは、本当にこれなのかなって……。ただ私が好きなもの、綺麗だと思ったものを並べるだけでいいのかなって。だって、その景色を見た人が、私と同じように好きだ、綺麗だって感じてくれるとは限らないし」

　その言葉に、シスター・フレーズは軽く目を見開いた。

「……あなたは、その夢術（レマギア）を見る人に、あなたがその景色を見た時に感じたのと同じ感動を味わってもらいたいのですね」

「え？うん。感動っていうほど大袈裟なものじゃないけど、楽しんではもらいたいよ。私、何かヘンなこと言ってるかな？」

「いいえ、あなたらしいと思いますよ」

　シスター・フレーズは心の内を口にすることなく、ただにっこりと微笑んだ。評価の高低や結果を気にするのではなく、ただ純粋に見ている人間を楽しませようと思って課題に打ち込む――それは人生に関わるような重大な課題であればあるほど、難しいものだ。それをあっさりと、しかも無邪気に無自覚に口にする目の前の小女神（レグナース）を、シスター・フレーズは赤子を慈しむ母のような眼差しで見つめた。

「とは言え、人間の好みや価値観は、生来の資質や生まれ育った環境により変化するものです。ある人にとっては最高の景色であっても、別の人からすれば、何とも思わないただの平凡な風景に映るかも知れません。何を見て感動するかは、その人の心次第、全ての人に受け入れられる夢術（レマギア）というのは難しいでしょう。ですからあなたは、あなたが良いと思ったものを貫き通せば良いのではないですか？」

「うん、ありがとう。……でもやっぱり、何か物足りないままなのは悔しいな。だから、もう少し考えてみる」

　そう言うと、ラウラは顎に手を当て、首をひねりながら何ごとか呻きだした。

「う〜ん。そっか、何が最高の景色かは人によって違う、かぁ……。そうだよね、よく考えれば当たり前なことだよね。それじゃ、人って何を基準に最高の景色を決めてるのかなぁ？私はどうやって決めてたっけ？好きな景色とそうじゃない景色の違いって何だろう？……う〜ん……思い入れが違う、とか？」

「納得のいくまで悩むのは良いことですが、あまり遅くまでこんな所にい

ると風邪をひきますよ」
　言われてラウラはハッとしたように匙杖（スプーンワンド）を元の形に戻し、あわてて自分の前髪にとめた。
「そっか、そうだね。肝心の選考会に病欠なんて洒落にならないし。じゃあ、もう部屋に戻るね。おやすみなさい、シスター・フレーズ」
　そう言って階段を下りて行こうとするラウラを引き止めるように、シスター・フレーズが問いかける。
「一つ、訊いても良いですか？」
「え、何？」
「あなたは一体何を目指しているのですか？ただ単純に夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）を目指しているのとは違うように思えますが」
　その問いに、ラウラは何度か瞬きを繰り返した後、何かを悟ったように大きく頷いた。
「うん、そう言われてみれば、そうなのかも。私は“夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）”になりたいわけじゃない。この島で最高の小女神（レグナース）になりたいんだ。誰よりも強い夢見の力を持った小女神（レグナース）に。それがたまたま“夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）”だったから、自然とそれを目指してるだけなんだ」
　その答えを聞いてなお、シスター・フレーズは問いを重ねる。その表情は真剣そのもので、まるで人の生き死にに関わるような重大事を見極めようとしているようにさえ見えた。
「なぜそれを目指すのか、訊いても良いですか？」
「えっと……何でだろう。うーん……たぶん、最高の小女神（レグナース）じゃないと敵わない、吊り合わない人がいるから、かな」
「それはもしかして、以前言っていた、あなたの幼なじみの少年ですか？」
「うん！フィグってね、すごいんだ。何でもできるし、何でも知ってるし、夢術（レマギア）も上手だし。きっとフィグが小女神（レグナース）だったら、メイシャちゃんにだって負けてないと思う。それに何より、すごく大きな夢を持ってるんだ。他の誰も見られないような、すごく大きくて、素敵な夢」
　フィグのことを語るラウラの瞳は輝きに満ちて、本当に心から彼のことを尊敬しているのだと雄弁に物語っていた。
「その夢を教えてもらった時、私、すごく焦ったんだ。だってその時の私には、将来の夢なんて全然なかったから。だから、フィグに負けないように、私も大きな夢を目指すことにしたんだ。って言っても、フィグの夢に比べたら全然ちっぽけなんだけど……」
　照れたように笑うラウラを難しい顔で見つめ、シスター・フレーズは何かを探るようにさらに問う。
「あなたの夢は、彼と競うためのものなのですか？彼と吊り合うためだけに、夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）を目指すのですか？」

「うん。最初はそうだったよ。でもね、夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）がどういうものなのか知ってからは、本気でなりたいって思うようになったよ。それに、夢を追いかけること自体が楽しくなってきたから」

　責めているようにも聞こえる硬い声の問いにあっけらかんとそう答えて、ラウラは無邪気に笑った。

「夢を追いかけるのって、すごく幸せ。だって夢に近づくためにいっぱい物を考えて、いっぱい努力して、一つ何かを乗り越えるたびに、新しい“自分（わたし）”が生まれるんだ。それまでどんなに頑張ってもできなかったことが、ある日突然、がんじがらめになってた糸が解けるみたいに、するっとできるようになったりして、毎日毎日少しずつ、自分が成長していくのが分かるの。なりたい自分（わたし）に……ううん、違う。それよりもっとすごい、今まで思いもしなかった自分（わたし）に近づいてく。時には壁にぶつかって、苦しくて、何日も、何週間も立ち直れないこともあるけど、それでも私、明日が来るのが楽しみで仕方がない。きっと明日になれば、今日よりもっとずっとすごい自分（わたし）になれているはずだから。こんな気持ち、夢を追いかけてなかったら、きっと味わえなかった。今の私が在るのは、夢を追いかけていたおかげ。だから、この夢はもうフィグのためじゃなく、私のための夢になってるの」

　シスター・フレーズは言葉もなくラウラを見つめた後、感嘆するかのような吐息をこぼした。

「……何年経っても変わりませんね、あなたは。人間は大人に近づくにつれ、未来が恐くなるものだというのに、幼い頃と変わらず、無邪気に明日を夢見て……」

　シスター・フレーズはそこで一度言葉を切り、愛しげに、それでいてどこか哀しげに微笑んだ。

「そんなあなただから、私はあなたを……」

「……え？」

　その時ちょうど九つの鐘の音が鳴り響き、ラウラはその言葉を最後まで聞き取ることができなかった。聞き返すラウラにシスター・フレーズはただ深淵な笑みを返し、そのまま鐘楼を立ち去っていった。

第５章　星のめぐる夜の夢

　ラウラは夢を見ていた。
　まだ幼い小さな手に手を引かれて、暗い森の中を歩いていく夢。
　つながれた手と手、伝わってくるほのかなぬくもりだけが世界の全てのような気がしていた、遠い日の夢。
　これから自分たちがどこへ向かおうとしているのか、ラウラは知っていた。
「大丈夫。ぜったい見つからないさ。“時狂いの森” には誰も入っちゃいけないんだからな」
　まだ七才のフィグがこちらを振り返り、不敵に笑う。
　小さなカバンと服のポケットに思いつく限りの荷物を詰め込んで、禁じられた森の中を、奥へ奥へと進んでいく。
　それはラウラが六才になってすぐの、ある夜の夢。小女神宮（レグナスコラ）に上がるのが嫌でフィグと一緒に逃げ出した、ラウラにとって一番大切な夜の記憶だ。
「わっ……、フィグっ、見て見てっ。空気が水玉模様になってる！」
　幼いラウラの指さす先には、星明かりを受けて銀色にきらめく小さな水の珠が、いくつも宙に留まっていた。
「ああ、それは雨だよ。森の魔力で雨の落ちる速度がものすごくゆっくりになってるんだ。だから雨粒が空中で止まっているように見えるんだよ」
「すごいすごい！こんなのよそじゃ見たことないよ！」
「これだけじゃない。もっとすごいものがいっぱいあるはずだぞ。この森では百年に一度しか咲かないはずの花が十日で咲くし、セミは七日を過ぎても生き続ける。水面にできた波紋は半日経っても消えないし、流れ星だって蛇が地を這うようにゆっくり空を流れるんだ。この森は時間の流れが他とは違うからな」
　それは曲がりなりにも駆け落ちであったはずなのに、二人に悲壮感はなかった。
　胸の中にあったのはこの思いきった冒険に対する期待と興奮だけで、この先どうしたら良いのかという不安など欠片も湧いてはこなかった。この頃はただ無邪気に、二人でいれば何でもできると信じていられたのだ。
「俺、この森に来たらぜったいに行きたいと思ってた場所が一つあるんだ」
「え？どこどこ？どんな場所？」
「行ってからのお楽しみ。でもラウラもぜったい気に入るよ」
　フィグはポケットから小瓶を取り出し、中に詰まっていた夢雪（レネジュム）を自分の手のひらの上に振りかけた。
「夢より紡ぎ出されよ！魔法の羅針盤（らしんばん）！」
　現れたのは星くずのようなラメが散りばめられた青透明の硝子板に細い銀の針がついた方位磁石。ラウラは興味津々の顔でフィグの手の中のそれ

を覗き込む。
「羅針盤よ、“星めぐりの丘” の場所を示せ！」
　フィグが叫ぶと、羅針盤の針は硝子の円盤の上をぐるぐると回り、やがてぴたりとある方角を指し示した。
「行こう。こっちだ」
　フィグに手を引かれるまま歩き出し、ラウラはその時覚えた感情を素直に口に出した。
「フィグはすごいね。何でもできて」
　フィグは驚いたように振り返り、ほんの少し頬を染めて沈黙した後、くすぐったそうに笑った。
「ラウラだってできるさ。この島では夢見る力さえあれば何でもできるんだからな」
「夢見る力……」
「ラウラにもあるだろう？夢が」
　問われてラウラはしばし黙る。この頃のラウラには具体的な将来の夢などまだ無かった。あったのは、この時芽生え始めた、ひどく漠然とした感情だけ。
（夢なんて、まだよく分かんない。でも、もし願いが叶うなら……この手を離したくないな。この先もフィグとずっといっしょにいたいよ。……フィグは、どう思ってるのかな。ラウラとずっといっしょにいたいって、思ってくれてるかな？）
「フィグは？フィグの夢は何？」
　つないだ手に力を込め、フィグの想いを確かめるように問う。その問いに彼は一瞬ひどく遠い目をした。その目にラウラはわけもなく不安を覚えた。
「丘に着いたらゆっくり話すよ」
　その宣言通り、フィグは丘に着くまでその話は一切口にしなかった。

　羅針盤の針が指し示すまま森を進むラウラには、自分がもうどのくらい歩き続けているのか全く分からなかった。自分の中の時間感覚では、もう丸一日以上歩き続けている気がするのに、一向に夜は明けないし、空腹も感じない。
「着いた。きっとここだ。星めぐりの丘」
　平坦だった地面がふいにゆるやかに傾斜しだした。木々の数はまばらになり、風の中に微かに潮の匂いが混ざる。
　二人は無意識のうちに早足になっていた。最後には走るようにして丘の頂上まで一気に駆け上る。

「うわぁ……」
　ラウラは感嘆の声を発したきり、しばらくは喋ることも忘れてしまった。
　丘の頂は広く開けた草原だった。遮るもののない空には満天の星が輝いている。
「ラウラ、座るか寝っころがるかしろよ。立って見てると目を回すぞ」
　既に草の上に足を伸ばしていたフィグが自分の隣をぽんと叩く。ラウラは言われるままフィグの横に腰を下ろした。そうして改めて空を仰ぐ。
「そっか……。だから“星めぐりの丘”なんだね」
　ラウラは感心したように呟いた。
　丘の上から見る星空は、北極星を中心にまるで円盤型（ディスク）オルゴールのようにゆったりと、しかし通常ならばあり得ない速度で回転していた。
　そして星がめぐるたびに、天空から微かに音が零れてくる。水琴窟に水が滴るような涼やかなその音色は、廻る星々が弾き出す音だ。音楽にもなっていないような不思議な、だがどこか懐かしいような気のするその音の連なりに、二人はしばし聴き入った。
「俺の夢は何かって、さっき訊いたよな」
　めぐる星の音の合間、フィグが口を開く。
「俺さ、この島の外の世界へ行ってみたいんだ」
「えっ!?」
　ラウラはフィグが何を言ったのか、一瞬理解できなかった。フィグが口にしたのはそれほどに突飛なことだったからだ。
「この島には“果て”がある。船に乗って海へ出ても、これ以上はどうしたって進めないっていう境界があるんだ。でもこの島の外の世界にはそれがない。どこまで行っても果てがない。世界をぐるりと一周できるし、星空へだって飛んでいけるんだ」
「でも、外の世界って、この島みたいに夢粒子（レフロゥム）から夢を結晶化したりできないんでしょ？」
「それは分からないさ。ただ単に向こうの人間が夢の紡ぎ方を知らないだけかもしれない。夢見島（レヴァリム）の住人が向こうへ渡ったことは一度もないんだからな。それに向こうの世界の人間は夢術（レマギア）が使えるわけでもないのに、自分の頭の中だけで、その世界に実際には存在しないような動物や景色やいろんな物語を生み出してるんだぞ。この島で夢術（レマギア）を山ほど見て育った俺たちより、よほどすごいと思わないか？」
　ラウラには何も言えなかった。ただ、目を輝かせて夢を語るフィグの顔を黙って見つめることしかできなかった。
「いつか俺はこの島の外に出るんだ。ギリシャ神話やケルトの妖精や神仙の生まれた国を自分の足で巡ってみたい。そしてそんな“夢”たちがどうやって生み出されたのかを知りたい。いつかきっと、ここよりもっと広い

“果てのない” 世界を旅するんだ！」
(……やだよ。私を置いて知らない世界に行っちゃやだ。置いていかないで。ずっといっしょにいたいのに……)
　ラウラの不安に揺れる瞳に気づかず、フィグは笑顔で話を続ける。
「だから、その時はいっしょに来いよな、ラウラ」
「え……？」
「『え？』じゃないだろ。俺を一人ぼっちにする気かよ。いっしょに来るよな？な？」
「行く！」
　ラウラは何も考えずに即答していた。
「行く！ぜったい行く！だからいっしょに連れてって！」
「ああ、もちろん。だからお前もその時までに、もっと夢術（レマギア）を上達させておけよ。この島の外に出るには、きっとものすごい夢見の力が必要になるんだからな」
(そっか。この先もフィグといっしょにいるためには、今のままの私じゃダメなんだ。もっと力がないと。フィグみたいに何でもできるようにならないと。そうじゃなかったら、きっと置いていかれちゃう……)
　見上げた先には、眩しいほどのフィグの笑顔と、廻り続ける星空。ラウラはこの光景を、一生忘れないだろうと幼心に思った。

　翌朝、目が覚めると、いつの間にか頬が濡れていた。
　ラウラはネグリジェの袖でそれを拭い、見た夢を思い返してみる。
　結局あの後、星の音を聴いているうちにうとうとしてしまった二人は、丘の上で眠り込んでいるところを捜索隊の夢術師（レマーギ）たちに発見され、家に連れ戻された。時間の狂う森で二人が一日半を過ごしている間に、森の外では二週間が経っていたらしく、二人は憔悴した両親に泣きつかれたり、こっぴどく叱られたりした。
「懐かしいな……」
　思い出し、思わずくすりと笑みを零す。
「どうしたの、ラウラ。朝からご機嫌そうね」
　同室のキルシェが、今洗顔をしてきたばかりという格好で部屋に入ってくる。
「うん、ちょっと懐かしい夢を見ちゃって。夢の中って、すごく鮮明に記憶が再現されるものなんだね。覚えてるつもりで忘れてたいろんなこと、全部思い出した……」
　そこまで言って、ラウラは自分で自分の言葉に驚いたように唇の動きを止めた。

「ん？どうしたの？ラウラ」

「……そっか。忘れてる思い出。美しいだけじゃない、思い入れの籠もった愛しい風景……。これが、答えになるかも知れない」

「え？あんた何言ってんの？」

「キルシェちゃん！私、ちょっと花歌の園まで行ってくる！」

　ラウラはがばっと起き上がり、脱いだ寝巻きをぽいぽいとベッドの上に放り出す。

「は !? あんた、朝食は !? 顔もまだ洗ってないでしょ !?」

「ダッシュで戻ってくるから大丈夫！今行っとかないと、せっかく浮かんだアイディアがしぼんじゃいそうなの！」

　適当な服に身を包み部屋の窓を全開にしたラウラは、小瓶に詰めた夢雪（レネジュム）を銀の匙杖（シルヴァースプーンワンド）に振りかけ叫ぶ。

「夢より紡ぎ出されよ！ジェットエンジン搭載・耐火耐熱装備付空飛ぶホウキ！」

「ジェットエンジンって、あんたソレ、前に失敗してホウキ燃やしたやつじゃ……」

「だから今回は燃えない装備にしたの！じゃあキルシェちゃん、行ってくるねーっ！」

　銀色に輝くホウキにまたがったラウラは、音速の速さで部屋を飛び出し、その一瞬後にはもう小女神宮（レグナスコラ）の屋根の遥か上空にいた。「きゃー」という悲鳴とエンジンの轟音が残響のように残される。

　エンジンの爆風で物がめちゃくちゃに散乱した部屋に一人残され、キルシェはしばらくの間、呆然と立ち尽くしていたが、やがて不気味に笑いだした。

「ラウラめ……。この後始末の貸しはでかいわよ。覚えてなさい」

第６章　“夢見の娘” 選考会

「今年は四人……か」
　円卓に座した老人の一人が厳かに呟く。小女神宮(レグナスコラ)の一室。居並ぶ六人の審査官は皆、難しい顔で視線を交わし合う。
「左様。四人じゃ。しかも四人全員が１４才。“朱鷺色の未年” 生まれの小女神(レグナース)は全員残っていることになる」
「有り得ないことではないとは言え、同じ年の生まれの小女神が一人も欠けずにこうしてそろうとは珍しい。１５０年前の例の年も、結局最後は一人に絞られたものの、直前まで同じ年の生まれの小女神が全員残っていたとありますが……。やはり、どこか重なるものがありますね」
「皆も薄々気づいていたであろう。島の夢雪(レネジュム)の総量は年々減少している。報告によれば “千年雪の丘” でさえ積雪量が減ってきているそうだ。１５０年前の記録と同じ……。これまでの例から考えれば、そろそろ “あれ” が来てもおかしくない頃だ」
「しかし、早過ぎやせんか？間隔があまりにも短過ぎる。前回と前々回との間には３００年近くの年月があったというのに、今回はたったの１５０年ですぞ？」
「それだけ “汚染” のスピードが速まっているということでしょう。“あちら側” での人口の増加、文明の進化はともに１５０年前とは比べものにならぬ速度で進んでいるのですから」
　しばし重い沈黙が降りる。誰もがその先を口にしたくない、この場から動きたくないとでも言うように硬い表情で唇を引き結んでいた。だが、そんな彼らに行動を促すかのように、部屋の外から鐘の音が響く。
「……時間、ですか」
「ああ、行かねばならん。我々の手で選ばねばならぬのだ。この島の……いや、世界の命運を握る者、真の夢見の娘(フィーユ・レヴァリム)を……」
「女神ならざる我々には荷の重過ぎる選択ではありませんか？『真の夢見の娘は女神(レグナリア)の御手により選ばれる』と、伝承にはあります。選考会を延期して様子を見てみては……」
「伝承が真実とは限らん。確かに前回は選考会を待たずして他の全ての小女神(レグナース)がいなくなり、ただ一人の小女神(レグナース)だけが残されたと記録にあるが、それが女神の作為によるものなのかどうかは誰にも分からぬのだからな。ぐずぐずと選択を延期していては先に事が起きてしまうかも知れん。そうなってからあわてて選ぶより、時間のあるうちにじっくり見極めて選んだ方が良かろう。人選を誤れば、また次回までの間隔が短くなってしまうのだからな」
「いずれにせよ、我々はただ、四人の中で最も夢見の力の強い者を選べばい

い。それだけです。女神もそれを望まれているはずですから」
　六人は再び視線を交わし合い、大きく頷くと椅子から立ち上がった。
「では、参りましょうか。夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）候補者たちが待っています」
　そうして彼らは夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）選考会の行われる小女神宮（レグナスコラ）の前庭へ向け歩き出した。この先、島に訪れる運命をこの時点で理解していたのは、まだ彼らと眠れる夢見の女神（レグナリア・レヴァリム）だけだった。

　前庭には既に数多くの見物人が集まっていた。シスター長アルメンドラは六人の審査官が席に着いたのを確認し、厳かに告げる。
「では、これより夢見の娘選考会を始めます」
　周囲から歓声が巻き起こった。夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）選考会は一年のうちで唯一、一般の島民が小女神宮（レグナスコラ）へ上がることが許される日なのだ。会場は老若男女がひしめき合い、まるで祭のように盛り上がっている。
「まずは夢見（レヴァリム）島の守護神であらせられる夢見の女神（レグナリア・レヴァリム）“フレア”に感謝の祈りを捧げましょう」
　並んでいたシスターたちが一歩前へ進み、祈りの歌を歌い始める。その歌声が響く中、ラウラはひそりと隣のキルシェに囁きかけた。
「ね、キルシェちゃん。フレアって、夢見の女神（レグナリア・レヴァリム）様のお名前だよね？」
「そうよ。あんた、まさか知らなかったわけじゃないでしょう？」
「ううん、知ってたけど……。でも何か変だなって思って。女神様の本当のお名前って、こういう改まった場でしか呼ばれないでしょう？普段は“夢見の女神”っていう呼び名ばっかり使われて。何でなんだろうなって思って」
「そりゃ、神聖なお名前だからみだりに使わないようにしてるんでしょ。……って言うか余裕あるね、あんた。これから選考会が始まるっていうのに」
　こそこそおしゃべりしているうちに、いつの間にか歌は止み、アルメンドラが険しい目つきで二人を見ていた。
「ラウラ・フラウラ！キルシェ・キルク！」
　厳しい声で名を呼ばれ、二人はびくりとして姿勢を正す。だがアルメンドラは咳払いを一つしただけで説教めいたことは口にせず、続けて他の二人の名を呼んだ。
「アメイシャ・アメシス、アプリコット・アプフェル。全員、前へ出なさい」
　夢見の娘候補者の四人が前に集まると、アルメンドラの横からシスターが一人、上部に穴のあいた白い木箱を掲げ持って進み出てきた。

「これより夢術演技（レマギア・アンテルプレタシオン）の順番を決めます。誕生日の早い者からくじを引いていきなさい」
「うわー……来た来た。夢見の女神様（レグナリア・レヴァリム）、どうかお願いします。一番最初と一番最後にだけはしないで下さい」
　四人の中で一番早く誕生日を迎えるキルシェが、口の中でぶつぶつと女神への祈りを唱えながら木箱に手を入れた。そして中から番号の書かれた札を引き出し……そこに書かれた数字を確認した途端にうなだれた。
「終わった……。よりにもよって一番最初なんて……。一番最初は点が辛くなるものって相場が決まってるのよね」
「ドンマイ、キルシェちゃん。考えようによってはいい順番だよ。あのメイシャちゃんの前に演技を見てもらえるんだから」
　二人がこそこそ会話を交わしている間にアメイシャが３番の札を引いた。残る順番は２番目か一番最後。四人の中で一番誕生日の遅いラウラは、自分では札を選ぶことができない。そして、アプリコットが箱から札を取り出した。その手に掲げられた数字に、ラウラとキルシェは息を呑む。
「アプリが２番ってことは……。ドンマイ、ラウラ。よりにもよって一番最後、しかもアメイシャの直後に演技だなんて……。私よりよっぽどツイてないよね」
　キルシェが心からの同情を込めて慰める。だがラウラはしばらく何かを考えるように遠くを見つめた後、首を横に振った。
「ううん、むしろ燃えるシチュエーションかも。皆、メイシャちゃんの優勝ばかりを予想して、誰も私に注目なんてしてない。だからこそ、そこですごい夢術を見せられたら皆をあっと言わせられると思うんだ。それにそういう逆転優勝みたいなの、すっごくドラマチックでおもしろいって思わない？」

　開会のセレモニーからほんの少しの準備時間をはさみ、すぐに一人目の演技（パフォーマンス）が始まる。
　白線で区切られた四畳半ほどの広さの演技スペースには地面いっぱいに夢雪（レネジュム）がまかれ、その外には夢雪がすぐに溶けてしまわぬよう、冷風を送り込む夢鉱器械（レムストーン・マシヌリィ）が４台設置されていた。
　キルシェは緊張した面持ちで銀の匙杖（シルヴァースプーンワンド）を構える。杖（ワンド）の柄についたさくらんぼ型の珠飾りが、揺れてきらりと光を弾いた。
「夢より紡ぎ出されよ！スウィフト著『ガリヴァー旅行記』第三篇より、空

飛ぶ島“ラピュータ”！」
　前庭中に響くように大きな声で唱えると、キルシェは杖の先端で演技スペースいっぱいに円を描いていった。一周し終えて円を閉じると、キルシェはそのまま後ずさり、演技スペースを離れる。直後、夢雪の積もった地面が白銀に輝き、そこから真円形の何かが轟音とともにせり上がってきた。
　それは、側面を幾重もの回廊に囲まれた島だった。回廊と回廊とは階段でつながれ、頂上には宮殿らしき建物も見える。船医ガリヴァーが遭難の末に辿り着いた人工の浮島・ラピュータだ。
　島は完全に地表に現れると、今度は空へ向けて上昇していく。それと同時にその姿はされにどんどん巨大化していき、ついには小女神宮（レグナスコラ）全体を覆うほどになった。観客たちは首を真上へ曲げ、空を指差しながら楽しげにざわめく。
「ほう、なんとダイナミックな……。それほど注目しておりませんでしたが、この小女神もなかなかやりますな」
　審査官の一人が空を仰いだまま感嘆の声を漏らした。
「うむ。しかし観客への魅せ方という点ではやや疑問を感じますな。こうして上空に浮かんでいますと、我々から見えるのはラピュータの底部のみ。ガリヴァー旅行記のラピュータでは島の底部はただの平らな硬石（アダマント）ですから、見ていて何の面白味もない。そもそも真上にあるものをこうして見上げるというのは少し酷な見せ方ですな。首も腰も痛くて敵いません」
　この言葉にキルシェの眉がぴくりと上がる。
「……聞こえてるってば。勝手なこと言ってくれちゃって。あれだけのイメージを紡ぎ出すのにどれだけこっちが苦労してると思ってんのよ。ま、いいわ。派手にすればいいんでしょ、派手にすればっ」
　キルシェは審査官たちに聞こえないよう小さく毒づいて、再度杖を振り上げた。
「まだまだ終わりじゃないよ！夢よ、我が意のままに動け！ラピュータ、アクロバット飛行！」
　キルシェが杖を振り回すと、上空に浮かぶ島は元の大きさに縮まり、まるで見えない糸で操られているかのように杖の動きに合わせて動き出した。
　さながら航空ショーのアクロバット飛行のようにくるりと上下に一回転したかと思えば、一気にスピードを上げ、観客たちや審査官の前を縦横無尽に飛び回る。観客たちは興奮し、口々に喝采した。だが、杖を振るキルシェの顔にはだんだんと汗がにじみ、隠しきれぬ疲労の色が浮かんでくる。
「ラピュータ、最後に皆の前を一周して」
　キルシェはふらつきながらも、かろうじてそれだけを告げる。島はその全貌を皆の目に見せつけるようにゆっくりと前庭を一周すると、光の粒となり一瞬で消え去った。

　演技を終えたキルシェはふらふらした足取りでラウラの横まで来ると、へなへなとその場にへたり込んだ。
「あー……疲れた。脳みそを極限まで使って疲れたわ」
「お疲れさま。すごかったよ、キルシェちゃん」
「あー……うん。でも、あれじゃダメだろうなー。いろいろイラッと来たもんだから、後半ヤケになってやり過ぎちゃったし。オリジナルのイメージぶち壊しって言われて評価下げられそう……」
　キルシェは体育座りした膝に顔を埋めてぼやく。その声には『もうダメだ』とでも言いたげな絶望の色がにじんでいた。
「でも、お客さんたちはすっごく喜んでたよ。すっごく迫力あったし」
　特に慰めを意識したわけではなく、ただありのままに感じたことをラウラは告げる。その声にキルシェは顔を上げ、力無く微笑んだ。
「うん、そうだよね。私なりのベストは尽くしたもんね。まぁ、私が全力を出したところで優勝はできないだろうけどさ。それでも、観客の皆を沸かせられただけでも大したものだよね？」
「キルシェちゃん……」
　ラウラが何か言葉をかけようとしたその時､アプリコットが銀の匙杖（シルヴァースプーンワンド）を手に演技の場に進み出てきた。二人は唇の動きを止め、そちらに注目する。
　アプリコットは静かに銀の匙杖（シルヴァースプーンワンド）を振り上げ、普段の穏やかな口調で唱え始めた。
「夢より紡ぎ出されよ。『万葉集』巻第七より……」
　アプリコットの匙杖（スプーンワンド）の先に、夢雪がひとひら、ひとひら、まるで磁石のように引き寄せられていく。匙杖の周りに浮き上がりふわふわと漂うそれは、まるで霞草の花束（ブーケ）のようだった。
「“天の海に、雲の波立ち……”」
　アプリコットは歌うように続きを唱える。すると宙に浮かんでいた夢雪（レネジュム）の群れが、爆発のように白銀の光を放ちながら四方へと弾け飛んだ。閃光に目を眩まされた観客たちは、直後、思いもしなかった光景に戸惑うようなざわめきを発した。
「え？何か私、目がおかしくなっちゃった？暗くて、周りが見づらいんだけど……」
「私も。何か目が変。今って昼間のはずよね？」
　ラウラとキルシェも不思議そうに目をこすって辺りを見渡す。

　先ほどまで青空が広がっていたはずの小女神宮（レグナスコラ）の前庭は、今や暗闇に包まれていた。空が急に曇ったわけでもなく、日が沈んだわけでもない。だがなぜか選考会の会場周辺だけが、そこだけ黒いセロハンで覆ったかのように明度を落していた。
　そして暗闇に包まれた地上には、水も無いのに波が立つ。それはただの波ではなく、ほのかに光るそれは、細かな泡の塊のような雲だった。それがふわりふわりと形を変えながら、浜辺に打ち寄せる波のように闇の中を寄せては返していく。

　アプリコットは尚も言葉を続け、匙杖（スプーンワンド）を振る。
「“……月の舟、星の林に漕ぎ隠る見ゆ”」
　観客たちのざわめきは一瞬にして歓声に変わった。アプリコットの言葉が終わった途端、皆の目の前に星の光を集めて創ったかのような林が出現したのだ。
「きれーい……。クリスマスのイルミネーションみたい……」
　ラウラがうっとりと呟く。
　銀の星の林の合間には金色に輝く三日月型のゴンドラが見え隠れしている。舟の漕ぎ手は月人壮士（つきひとおとこ）だ。
「ほぅ……。倭歌の世界観をそのまま具現化するとは、なかなかのアイディアですな」
　審査官の一人がため息混じりに呟く。
「先ほどの小女神の夢術はダイナミックでしたが、こちらは詩的で美しい。今年注目すべきはアメイシャ・アメシス一人と思っておりましたが、他の候補者たちもなかなかに見応えがありますな」
「しかし、派手さと個性、具現化のクオリティという点ではやや難がありますかね。色数も少ないですし、夢晶体（レクリュスタルム）もやや平面的です。星の林も街頭のイルミネーションとさほど変わらない。夢術でなくてもアミューズメントパークのアトラクションなどで造れてしまえそうな光景です」
　審査官たちはあくまでも冷静で手厳しい。その声が聞こえているのかいないのか、アプリコットは穏やかな表情のまま静かにお辞儀をし、演技を終了させた。

　アプリコットが演技の場から立ち去ると、運営管理者席から幾人ものシスターたちが夢雪（レネジュム）入りの瓶や地面をならす道具を手に持ち出て来る。演技の場が整ってくるにつれ、観客たちの間で次の演技を待ちきれないとでも言うような奇妙な興奮とざわめきが広がっていく。皆、次に演技するの

が今年の夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）の最有力候補者であると知っているのだ。
　観客たちの重い視線をものともせず、アメイシャは泰然と演技の場に進み出る。プレッシャーなど端から感じていないかのような、人々の期待も歓声も当然のことと受け止めているかのような、そんな態度に見えた。
　演技スペースの中央に静かに立ち、アメイシャは観客たちを見渡した。その顔にはうっすらと笑みが浮かんでいる。それは余裕の笑みなどという生易しいものではなかった。
　それは、女王の笑みだ。己の敗北など微塵も考えていない、それどころか、己の夢術を見るために集まってくれた客人たちに対し、感謝し、もてなそうとするかのような“主催者”の笑みだった。
　アメイシャは舞でも舞うかのように優雅に匙杖（スプーンワンド）を振り上げ、高らかに告げた。
「夢より紡ぎ出されよ。“カンブリア紀の海”」
　そのままアメイシャは杖をそっと地に触れさせる。途端、杖の先から激しい風が巻き起こる。それは地まかれた夢雪を巻き上げ、荒れ狂う雪嵐のように激しく吹きすさぶ。全てが白銀の色に覆い尽くされ、ホワイトアウトする。
　そして一瞬後に視界が晴れた時、世界は一変していた。
「これは……!?」
「すごい。私たち、海の中にいるよ」
　そこかしこから驚嘆の声が上がる。
　それまで芝生が敷きつめられていたはずの前庭は、白亜の砂が降り積もった海の底へと変わっていた。天を見上げると遥か高くに、光のゆらめく水面が見える。そして人々の頭上やすぐ横を、今まで見たこともないような奇怪な姿をした海洋生物がゆったりと泳ぎ回っている。
　それは恐竜が生まれるよりも前の時代、海の中で生命が爆発的に進化した頃の、誰も見たことがない過去の地球の光景だった。
「やーっ、ちょっと、何あれっ。何かキモチワルイ形してるっ。虫っぽいよ、目がいっぱいだよ、ウネウネしてるよっ。怖いぃーっ」
　悲鳴を上げて腕にしがみつくラウラに構いもせず、キルシェは呆然と口を開く。
「見渡す限り全部海の底だわ。果てが見えない。それになんてリアルなの……。私なんかとはスケールもレベルも全然違う……。やっぱりアメイシャは天才なんだ……」
　興奮して騒ぎだす観客たちの横で、審査官たちも同様に興奮に頬を染めていた。
「素晴らしい！アノマロカリスにオパビニア、レアンコイリアにピカイアにハルキゲニアまで！カンブリア紀を生きた古代生物たちが細部に至るまでリアルに再現されている！」
「伝承でも書物でもなく“時代”を題材に選んだというのもまた、個性的で

良いですな。確かに、“今ではない時代、今では存在しない生物たち” もまた、人々の夢見るもの。ロマンを感じます」

「これだけ広範囲に渡って夢を紡ぎ、かつあれだけ多くの夢晶体（レクリュスタルム）の生物を同時に動かしている。技術力も申し分ありません。やはり他の候補者とはレベルが違いますな」

　審査官たちは先ほどまでの冷静な態度が嘘のようにはしゃいでいた。泳ぎ回る古代生物たちを一体一体指差し、名前を呼んではその詳細な情報を仲間に説明する。その様子はまるで昆虫採集に来た少年のようだった。

　規定時間ギリギリまでたっぷりと古生代の海の風景を見せつけて、アメイシャはようやく杖を下ろした。海の風景が揺らいで薄れ、元の小女神宮（レグナスコラ）の風景に戻る。だが観客たちも審査官たちもまだ興奮醒めやらぬ表情で口々にアメイシャの演技について感想を交わし合っている。それはアメイシャが立ち去り、シスターたちが次の演技者のための準備を始めても変わらなかった。

　キルシェは気遣わしげにラウラを見やり、力づけるようにその肩を叩く。

「ラウラ、大丈夫？やりづらいかもしれないけど、平常心よ！あんたはあんたの夢を紡げばいいんだから」

　ラウラはきょとんとした顔でキルシェを見つめた後、にっこり笑って頷いた。

「うん。大丈夫だよ。私の夢術（レマギア）はメイシャちゃんや皆のほど派手じゃないけど、でも、絶対に皆の心に届くって信じてるから！」

　そのままラウラは銀の匙杖（シルヴァースプーンワンド）を手に元気良く駆けだしていく。その顔に不安の色など一切ない。

　そこには、早く自分の夢を紡ぎ出したくてたまらないとでも言いたげな、ワクワクした表情しか浮かんではいなかった。

第７章　ラウラの紡ぐ夢

「うわー、可哀想だな、お前の幼なじみ。よりにもよってアメイシャ様の後に演技だなんて。こりゃ、皆まともに見やしないぞ」
　未だアメイシャの夢術(レマギア)に酔いしれざわめく人ごみの中、リモンが本気の同情を込めて言う。その声にフィグは硬い表情でうなずいた。
　夢見の娘(フィーユ・レヴァリム)選考会は島の少年たちにとっても重大な関心事だ。フィグたち四人も当然のように選考会の見物に訪れていた。だが、演技スペースがよく見える前方の場所は既に他の島民たちに埋められており、フィグたちは人と人の合間から必死にのぞき見ることしかできなずにいた。フィグがここにいることに、おそらくラウラはまだ気づいていない。
　フィグはもどかしい思いで歯噛みした。せめて顔が見える位置にいれば、これから演技の場に出るラウラに声援(エール)を送ることができるのに、こんな後ろの場所ではそれすらもできない。
「ダメ元で大声で応援してみる？こんなにザワザワした中じゃ向こうに聞えないかもしれないけど」
　ビルネの提案にフィグはうなずきかけ、だがすぐに首を横に振った。人垣の隙間から一瞬、演技の場へ駆けてくるラウラの顔が見えたからだ。
　フィグは強張っていた表情を緩め、ラウラにつられたように微かな笑みを浮かべた。
「……大丈夫だ。あいつは緊張も動揺もしていない。心から選考会を楽しんでる」

　ラウラは演技スペースの中央にちょこんと立つと、まだざわめきの治まらない周囲へ向け、ぺこりとお辞儀をした。
「じゃあ、行きます！」
　大きく振り上げた杖の先端を、夢雪(レネジュム)の積もった地に突き刺してラウラは叫ぶ。
「夢より紡ぎ出されよ！“思い出の走馬灯(ファンタスマゴリア)”！」
（……“思い出の走馬灯(ファンタスマゴリア)”？）
　聞き慣れないその言葉に、フィグも、周りの人垣もさすがに雑談を止め一斉にラウラに目を向けた。静まりかえった会場の中、だが、地に積もった夢雪(レネジュム)にはっきりとした変化は何も起こらない。
（何だ……？一体、何をやろうとしてるんだ、ラウラ……）
　人々が疑問の声にざわめきだす中、ふと一人の島民がラウラの足下を指

差した。
「……何だ、あれ。煙か？」
　演技スペースに振り撒かれた一面の夢雪から、水蒸気のように淡くほのかな白銀の光が立ち上ってくる。それは徐々にその密度を増し、霧のように辺りに漂い始めた。同時に、不思議な“音”が響き始める。
　それは、降り積もった雪が一粒一粒溶けていくような、あるいはソーダ水の泡が弾けるような、風が木の葉を揺らすような、誰かのひそかな囁きのような、ささやかな、しかし確かに鼓膜をくすぐる音。初めは途切れ途切れに聞こえてきたそれは、重なり合い、響き合い、一つのメロディーを織り成していく。
（これは……“思い出のアルバム”か？あの日、ラウラと花歌の園で聴いた……）
　呆然と立ち尽くすフィグの耳に、聞き慣れた声が吹き込まれる。
『思イ出シテ、イツカノ思イ出ヲ』
「ラウラ…… !?」
　間近で囁かれたように聞こえたそれに思わず振り返るが、そこにラウラはいない。いつの間にか周りは白霧に包まれていた。景色すらぼやけていて、よく見えない。そしてそこには変わらず、不思議なメロディーと声が聞こえていた。
『思イ出シテ。タクサンノ記憶ノ中ニ埋モレタ、アナタノ一番大切ナ思イ出ヲ』
　まるで子守唄のようなその声とメロディーに、フィグは眠りに誘われるように意識を薄れさせていく。
『思イ出シテ。忘レテイナイツモリデ忘レテシマッタ、ソノ思イ出ノ細部マデヲ……』
　夢現のぼんやりとした意識の中、フィグは、何かが自分の目の前でからからと音を立てて廻っているのを感じた。それは光を灯しながら回転し、その光で霧の中にいくつもの光景を映し出しては消していく。
　それは、アルバムの写真のように切り取られた、フィグの記憶の一場面一場面だった。まるで、死の間際に現れると伝えられているもののように、今まで生きてきた人生の記憶が走馬灯のように次々と映し出されては消えていく。めまぐるしく移り変わる景色の中で、ふいにある一つの光景がフィグの心に引っかかった。
「あ……っ」
　通り過ぎていくそれを、引きとめようとするように思わず手を伸ばす。その手が目の前で廻り続ける灯りに触れた瞬間、フィグは白銀の光に包まれた。

　気がつくと、フィグは丘に座っていた。空は暗く、頭上では銀の星々が神秘的な音を奏でながら、ゆっくりと廻っている。忘れもしない、星めぐりの丘の風景だ。
　フィグは呆然とした。自分が直前まで選考会の会場にいたことは覚えている。これがラウラの紡いだ “夢” なのだろうということも理解できる。だが、今フィグの目に映るこの風景は、夢とはとても思えないほど、何もかもがあまりにもリアルだった。草の匂いも、空から零れる星の音も、頬に当たる風も、そして……
「この島の外、かぁ。一体、何があるのかなぁ？」
　傍らで幼い声が問いかけてくる。フィグの隣にはあの日と同じ、六才になったばかりのラウラがいた。ラウラは眠気に半分負けたような声で、それでも一生懸命に言葉を続ける。
「どこまで行っても果てがないなら、きっと、いつまでだって、見たことのない何かを探して冒険ができるね。ずっと、ずーっと、終わりのない、果てしない冒険が……。ねぇ、フィグ。約束だよ。私を置いていかないでね。私も、フィグとずーっと、いっしょに……」
　そこまで言って、ラウラはついに眠気に負けた。フィグの右肩にぽすりと重みが加わる。そして肩越しに小さな寝息とぬくもりが伝わってきた。何もかもがあの日と同じ……、もう二度と戻れないと思っていた夜の風景。当たり前に二人一緒にいられた最後の夜の風景だ。フィグは、ふいに胸がいっぱいになった。
（ラウラ……）
　右肩にもたれかかって眠る小さなラウラに触れたくて、手を伸ばそうとする。だが、その手は指一本ですら、フィグの意のままにならなかった。そしてあの日と同じように、ラウラの体温を感じながら、フィグのまぶたも次第にとろんと重くなってきた。このまま眠って、その先ふたりがどうなってしまうのか、もうフィグは知っている。
（……嫌だ。ここでまた眠ってしまうのは、もう嫌だ……）
　運命に抗うように、フィグは必死に指を動かそうとする。眠るラウラの肩に触れて、揺り起こして、失われてしまったあの日の続きを見ようとでもするように……。
（嫌だ……。俺は、もっと、お前と一緒に………………）

　眠りからふいに覚めたように、フィグはハッと目を見開いた。そこはもう星めぐりの丘ではなく、元通りの小女神宮（レグナスコラ）の前庭。辺りにたちこめていた白銀の霧も、聴こえていたメロディーも、全てが消えてなくなっていた。まるで、初めからそこに無かった夢幻のように。

　会場は不思議に静まりかえっていた。歓声も拍手も起こらない。ある者は涙を流し、ある者は頬に幸せそうな笑みをたたえ、皆が皆、我を忘れたようにその場に立ち尽くしていた。
　やがて、一人、また一人と夢から覚めたように周囲を見回し、堰を切ったように喋りだす。

「おい！すごいぞフィグ！俺、生まれて初めて夢術（レマギア）が成功した日のこと、思い出した！」
　リモンが興奮した顔でフィグの肩をつかみ、激しく揺さぶる。
「僕はアーちゃ……アプリ様の小さい頃のこと、思い出した……」
　ビルネがまだ半分夢の中にいるような表情でぼんやりと呟く。
「俺なんて、死んだひいばあちゃんに会ったぜ。俺のこと、すごく可愛がってくれてたんだ」
　カリュオンが目尻の涙を拭いながら言う。
「そうか。皆、それぞれ見たものは違うのか」
（それぞれの人間にとっての、一番大切な思い出……。それを思い出させるための夢術だったんだな。ラウラ、お前、なんてものを紡ぎ出したんだ。こんな夢術、前代未聞だ。しかも、俺にさえ何をどうやったのか、夢術の構成がさっぱり分からないなんて……）
　その時フィグの胸の内に湧いたのは、紡ぎ出された光景に対する懐かしさや感動よりも、得体の知れない畏れの方が勝っていた。今までよく知っていたはずのラウラが、急に見知らぬ、とてつもなく大きな存在になってしまったかのような感覚を覚え、フィグは知らず身震いする。
　やがて、さざ波のように少しずつ、拍手が巻き起こっていった。それはすぐに会場全体に広がり、嵐のように鳴り響く。拍手を送られたラウラは再びぺこりとお辞儀をし、照れたような表情で自分の席へと戻っていった。

「ラウラ！あんたってスゴイわ！一体どうやってあの夢を紡いだの!?あの思い出はあんたの全然知らないことのはずなのに」
　元の席に戻ったラウラを、キルシェがきつく抱きしめて出迎える。
「えっとね、あれは私が紡いだわけじゃないよ。元々皆の記憶の中にあったものを引き出しただけ。人間って本当は、すごくはっきり昔のことを覚えてるものだって、私は思うんだ。でも後からどんどん新しい記憶が積み重なっていって、埋もれてしまって、見えなくなるの。だから夢の中とか死の間際とか、そういう特殊な状況でないと思い出せないんだよ。だから私は皆がそれを思い出せすお手伝いをしようと思って、あの夢を紡いだの。たくさんの記憶の中から、一番大切な記憶を見つけられるように、そしてそれが胸に刻んだそのままの形で頭の中に再生されるように、そういう祈

りを込めて夢を紡ぎ出しただけだよ」
「ううん、あんたはスゴイわよ。あんな夢、あんたにしか紡げない。誰にも真似できない。アメイシャだってそう思ってる」
　そう言ってキルシェが指差した先では、いつもクールで表情を崩さないはずのアメイシャが珍しく動揺したようにうろうろと視線を彷徨わせ、心なしか青ざめた顔で唇を噛みしめていた。ラウラはそこで初めて己の状況に思い至る。
「え……。私、もしかして……優勝できちゃうかも？」
「『かも』じゃないわよ。もう、あんたで決まりでしょ！全く、あれだけの夢を紡いでおきながら相変わらずボケボケしてるんだから」
「え？うわわわわっ、ど、どうしよう、キルシェちゃんっ」
「とりあえず落ち着きなさい。まぁ、何にせよ、発表は審査会議の後なんだから、その間に優勝者スピーチの内容でも考えてなさいよ。どうせあんたのことだから、今まで何も考えてないでしょ？」
「うぅう……、そういうの、苦手だよ。『うれしいです、ありがとうございます』だけじゃダメかなぁ？」
「ダメに決まってるでしょ。そんな一言二言だけで帰られちゃ、皆が唖然としちゃうってば」

　夢見の娘(フィーユ・レヴァリム)選考会は、小女神宮(レグナスコラ)の人間と一般の島民が触れ合える数少ない機会だ。小女神宮の奥で審査会議が行われている間にも、外では模擬店や劇・ダンスの披露などの交流行事が行われ、そこは普段とは違う、ちょっとしたお祭のような雰囲気になる。
　見物に訪れた島民たちは、そんな雰囲気を楽しみながらも、話題は先刻行われた選考会のことでもちきりだった。とは言え話題の中心は、例年のように誰が夢見の娘(フィーユ・レヴァリム)に選ばれるかということではない。ほとんどの人間が目を輝かせて語るのは、ラウラの夢術(レマギア)によって自分がどんな思い出を蘇らせたのかということだった。
　やがて数時間の時を経て、審査会議の終わりが告げられる。その合図は審査官の一人が夢術(レマギア)で打ち上げる煙火(はなび)だった。それは青空のキャンバスにするすると筆を走らせるように、紅の煙で華麗な薔薇の花を描いていく。爆音の代わりに響き渡るのは重厚なオーケストラのファンファーレだ。人々はその合図を機に、再び選考会場へと集まっていく。
「それではこれより夢見の娘(フィーユ・レヴァリム)選考会の選考結果を発表致します」
　シスター長・アルメンドラの厳かな声に、ざわついていた会場が一気に静まりかえる。

観客たちの視線はシスター長の前に並ぶ四人の小女神（レグナース）のうちの一人――ラウラ・フラウラに熱く注がれていた。結果発表を待つまでもなく、既に夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）は決定しているとでもいうように。
キルシェは自分のことのような誇らしげな顔でラウラを見つめ、アメイシャは表情を隠すようにうつむき、アプリコットはそんなアメイシャを気遣わしげに見ている。そしてウラウラは、緊張のあまりガチガチに固まり、棒のようにその場に立っていた。
「厳正なる審査の結果、今年度の“夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）”に選ばれたのは……」
アルメンドラは勿体をつけるようなわずかの間を置き、今までと変わらぬ声音でそれを告げた。
「アメイシャ・アメシス」
呼ばれたその名に、人々の間からどよめきが起こる。信じられないことを聞いたとでも言うような、納得できないとでも言いたげな声だった。
夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）候補者たち四人も信じられないという表情でアルメンドラを見つめている。名を呼ばれたアメイシャ当人でさえそうだった。アルメンドラは大きく咳払いをし、言葉を続ける。
「小女神（レグナース）ラウラ・フラウラの夢術（レマギア）は、確かに素晴らしいアイディアを持った、今までにないものでした。しかし、その夢術（レマギア）はラウラ・フラウラ自身の力のみで紡がれたものではなく、あくまで皆の思い出を引き出す補助的役割を果たしたに過ぎません。それを、自らの力のみを用いて夢術（レマギア）を紡いだ他の候補者と同等に比べることはできない、というのが審査官の皆さんの意見でした。よってその分を差し引き、夢晶体（レクリュスタルム）の量・質・範囲、細部までの描写力、構成力、発想力などにより総合的に判断した結果、優勝者はアメイシャ・アメシスと決定したのです」
初めこそ驚いた表情で固まっていたアメイシャだったが、その顔には次第にいつもの皮肉な笑みが戻っていった。アメイシャは未だ呆然と立ち尽くすラウラにくすりと笑って囁きかける。
「『策士策に溺れる』とはこういうことだな。君の夢術（レマギア）は確かに人々を感動させた。だが実際のところ、君は形となるものは何一つ紡ぎ出していない。審査官たちはそのことを冷静に見定めていたようだ。残念だったな」
「アメイシャ、打ちひしがれている人にそんなことを言ってはダメ」
アプリコットがたしなめる。だがアメイシャは謝りもせず、優雅な足取りで優勝者の席へと歩いていく。
「以下の順位は次の通りです。二位ラウラ・フラウラ、三位アプリコット・アプフェル、四位キルシェ・キルク……」
順位の発表もアメイシャによるスピーチもラウラの耳には全く入っていないようだった。ラウラはただ凍りついたように前を向いたままその場に

立ち続け、全てが終わるなり、逃げるようにその場から走り出した。キルシェもアプリコットも掛ける言葉が見つからず、ただ黙ってそれを見送ることしかできなかった。

　夢が破れた日でも、いつもと同じように時間は過ぎていき、日は暮れる。
　ラウラは鐘楼の壁に身をもたせ、膝を抱えて空を見ていた。薄紅の花びらが夕日を透かし、灯を点したように光りながら降ってくる。ラウラの好きな光景だった。
「ラウラ・フラウラ」
　ふいに声をかけられても、ラウラは驚かなかった。何となく、来てくれるような気がしていたし、心のどこかで期待してもいた。
「シスター・フレーズ……、来てくれたんだね」
　シスター・フレーズは身体の重みを感じさせない、どこか浮世離れした足取りで、ふわりふわりと尼僧衣（シスターローブ）をなびかせながら歩み寄って来る。
「選考会でのあなたの夢術（レマギア）、見せてもらいました。とても素晴らしいものでしたね」
「……ありがとう。でも、選ばれなかった。頑張って考え出したのにな。ああいう風に評価されるなんて、思ってもみなかった」
　シスター・フレーズはしばし無言でラウラを見つめた後、おもむろに唇を開いた。
「あなたの夢術（レマギア）は補助的なものなどではありませんでしたよ。確かにあなたは夢を物質として具現化したわけではありませんでした。人によっては、あなたは何も紡いでいないということになるのかも知れません。ですが、私は知っています。あなたは “魔法” を紡ぎ出したのですね。あなたにしか紡げない、皆を幸せにする、あなただけのオリジナルの “魔法” を」
「シスター・フレーズ……」
「それに、技術的にも革新的なものでした。あなたは夢雪（レネジュム）を霧状の細かな水の粒に変え、人々に吸わせることにより、その人の意識の中に夢晶体（レクリュスタルム）——夢幻灯機（ファンタレム・プロジェクタ）を紡ぎ出しだのですね。夢雪（レネジュム）による音楽と囁きで人々がその頭の中にある一番大切な記憶を思い出すよう暗示をかけた上で……」
「うん。夢幻灯機（ファンタレム・プロジェクタ）って、触れた人の脳内イメージを増幅して周囲に映し出す仕組みでしょ？本来は本の中の風景を映し出すための道具だけど、人間の記憶に使ってみたら、ぼんやりしてる昔の思い出も鮮明に蘇るんじゃないかって思って。夢雪（レネジュム）を霧に変えるのは、いろいろ実験してみて、あれが一番上手くいったからなんだ。何十回も、失敗しては方法を変えて……選考会までに間に合うのかすっごくはらはらしたよ。成功した時には、自分でも驚いたし、すごくうれしかった。私にこんな夢が紡げるなんて、自分でも思ってなかったもん。今まで紡いできた中でも一番の、最高の夢だって思った。誰にも負けない夢だって。……でも、結局は負けちゃったんだよね」
　自嘲するようなその声に、シスター・フレーズは静かに首を横に振る。

「あなたの夢は負けてなどいません。少なくともあの場に集まった島の民たちは皆、アメイシャ・アメシスではなくあなたを夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）に選んでいました」
「……そっか。それは……うれしいな」
　ラウラは寂しげに微笑む。嬉しいとは言いながらも、心の底からは喜べないと言いたげな笑顔だった。その笑みの裏に隠された思いを、シスター・フレーズは敏感に感じ取った。
「悔しいのでしょう？悲しいのでしょう？あなたのその思いは当然のことです。あなたが今日のために数年間、どれほどの努力を重ねてきたのかを私は知っています。……ずっと見てきましたから」
　端から見ればいつも気楽にへらへらしているようにしか見えないラウラだが、その陰でどれほどの努力を積んできたのか、シスター・フレーズは知っていた。
　夢見の娘を目指すことを決めてから、ラウラは一日も努力を欠かしたことはなかった。ただ、ラウラはその努力を一人遊びや他人と競い合う遊戯（ゲーム）に変え、努力の上に『努力を楽しむための努力』を重ねてきた。それがゆえに、周りからは何の努力もせず、ただ遊んでいるようにしか見られてこなかったのだ。
　ラウラは膝に頬を埋めたまま、呟くようにぽつりぽつりと語りだした。
「こんなに悔しかったり悲しかったりするなるなんて、私、思ってなかったよ。だって、夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）になりたいのは皆同じだもん。皆、同じように努力して、頑張ってるんだもん。だから、その結果誰が選ばれても恨みっこなしって、今日が来るまではずっと思ってた。なのに、無理だった。私、今、すっごく辛い気持ちで頭がぐるぐるしてる。メイシャちゃんに『おめでとう』って、笑って言うことができない。『何で私の夢術（レマギア）が選ばれなかったのか』って……そんなことばかり考えちゃうんだ」
「ラウラ……」
「何よりも辛いのは、あの夢がもう皆に見てもらえないっていうこと。自分でも自慢できるような、誇りに思えるような、すごい夢だって思ってたから、あの場にいた人たちだけじゃなくて、もっとたくさんの、島中の皆に見て欲しかった。もっともっとたくさんの人を笑顔にしたり、嬉し泣きさせたりしたかった……」
　涙に潤むラウラの瞳をじっと見つめ、シスター・フレーズは何かを思い悩むように唇を噤んでいた。だが、しばしの沈黙の後、決心したようにラウラに問いかけた。
「ラウラ、あなたの夢術（レマギア）がなぜ選ばれなかったか、理由を知りたいですか？」
　その問いにラウラはハッと顔を上げる。
「知りたい。教えてくれるなら、知りたいよ」
「……あまり愉快な話ではありませんよ。聞けば、あなたはさらに傷つく

かも知れません」
「それでも、知りたい。私の何がダメだったのか、知りたいよ」
　ラウラは立ち上がり、必死に懇願する。その真剣な眼差しを、シスター・フレーズは痛ましげに見つめ返した。
「ラウラ、あなたの夢術（レマギア）に駄目な部分など、一つもありません。審査会議はあなたが思っているようなものではないのです」
「え……？」
「審査官も結局の所は生身の人間。その審査には様々な思惑やエゴが絡みつくものなのですよ。……あなたの夢術（レマギア）は斬新過ぎました。プロの夢術師（レマーギ）である審査官たちが数十年かかっても編み出せなかった……いえ、思いつくこともできなかったものを、あなたはその歳で紡ぎ出してしまいました。それをあっさり認めてしまうということは、一部の人々にとって、己自身を否定するも同じことなのですよ」
「え……？」
　ラウラは、ただ疑問の声を繰り返すことしかできなかった。それは、まだ幼いラウラの想像の及ばない、複雑な人間の心理だった。
「あなたに彼らを否定する意図など無いことは分かっています。ですが、事実、あなたはその存在自体が既に彼らにとって脅威なのです。そして人間は本能的に、己にとっての脅威を排除しようとするもの。いつの世も、新し過ぎるものは激しい反発に合い、受け入れられるまでには相応の時間と努力を要するものなのです。歴史上、数多の偉人が苦しんできたように」
「そんな……」
「もちろん、世の中はそのような人間ばかりではありません。審査官の中にもあなたを支持する人たちはいました。ですが、結局は多数派の意見に敗れてしまったのです。そもそも審査官の間では元々アメイシャ・アメシスに対する評価がとても高く、逆にあなたはこれまで何の注目もされてきませんでした。今回あなたが紡いだ夢術（レマギア）も、偶然にできた“まぐれ”で、実力ではなく運だったのではないかと……あなたの能力を疑問視する声もあったのです」
「まぐれだなんて、ひどいよ。一生懸命考えて編み出した夢術（レマギア）なのに」
「そうですね。夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）を真剣に目指す以上、己の夢術（レマギア）に力を尽くさない候補者などいません。たとえそこへ至るまでの過程や努力が評価の対象とならないとしても、それぞれの血と汗と涙のにじんだ夢術（レマギア）を、軽んじて良い理由などあるはずがないのですが。人間は、他人を選ぶという立場に立つと、そんな大切なことさえ忘れてしまうものなのでしょうか……」
　シスター・フレーズは物思わしげに溜め息をつくと、再びラウラをじっと見つめた。
「納得できないでしょうね。私もこの決定には納得がいきません。……審

査官たちに怒りを覚えますか？」

「……そうだね。怒りが無いって言ったら嘘になる。けど、それ以上に悲しいよ。私に、そんな思惑とか先入観とかエゴとか、全部ねじ伏せて、吹き飛ばしてしまえるだけの実力があったら良かったのに。否定したくても否定しきれないような、そんな何かがあったら良かったのに。そうしたら、こんな所で散らせることなく、あの夢を最高の舞台に持っていってあげられたのに。私が、もっと上手くあの夢を紡いであげられていたら……」

　自分の夢術（レマギア）のことを語るラウラのその瞳は、まるで我が子の不幸を嘆く母のようだった。シスター・フレーズはそんなラウラを見下ろしたまま、審査会議の様子を思い返していた。

　審査会議は例年になく紛糾した。ラウラの夢術（レマギア）をどう捉えるかで、審査官の意見が割れたからだ。ラウラにとってあまりに不本意であろう発言の数々に我慢ができず、シスター・フレーズは思わず立ち上がり、意見を述べていた。

「皆さん、どうして自分の心に素直に耳を傾けないのですか？皆さんは、ラウラ・フラウラの夢術（レマギア）に何も感じなかったのですか？」

　場は一瞬、静まり返る。だが、すぐにその言葉は一蹴された。

「確かにラウラ・フラウラの夢術（レマギア）は感動的だった。だが、我々は感情的に審査を下すことはできないのだ」

「我々が感動したのはラウラ・フラウラの夢術（レマギア）にではない。自分自身の記憶に感動したのだよ。そこを間違えてはいかん」

「そもそも、全員見た光景が違うのでは審査のしようがないではないか。あれでは夢術（レマギア）の基礎能力をどの程度持っているものなのか、全く判断がつかん。そんな実力も分からぬあやふやな小女神（レグナース）に世界の運命を託すのは危険じゃよ」

「そう。今年の選考会は世界の命運がかかっているのだからな。慎重に選ばねばならん。その点、アメイシャ・アメシスならば安心だ。実力も折り紙つきだからな」

　シスター・フレーズは審査官たちを厳しく見据え、尚も唇を開く。

「真の夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）に求められるものは、単なる実力だけではなく、その心なのではないのですか？皆さんには分からなかったのですか？ラウラ・フラウラの夢術（レマギア）に込められた、優しい想いが」

　だが、その言葉さえも審査官たちの心には届かなかった。

「確かにそうかもしれん。だが、心など目に見えぬものをどうやって計れ

と言うのだ。結局は目に見える結果で判断を下すしかないのだよ」
「心など、主観によって左右されるもので判断するのは公平性に欠けるだろう。ならばいっそ、各候補者の夢晶体(レクリュスタルム)を項目ごとに数値で評価し、その総合点により優勝者を決めるのはどうだろう」
「なるほど、それならば分かりやすいし、後々のためにデータとして残すこともできる」
「ならばさっそく、項目と何点満点なのかを決めましょう」
　一旦話がまとまると、それまで揉めていたのが嘘のように会議はスムーズに進行していった。そして各審査官の採点の結果、ラウラは発想力では満点をとったものの、他の項目で伸び悩んだため、アメイシャに敗れることとなった。
　シスター・フレーズはそれ以上審査に口を出すことはなかった。ただ、会議が終わり退室する間際、こんな一言を残していった。
「……残念です。夢術師(レマーギ)の中の夢術師(レマーギ)たる審査官の皆さんなら、正しい判断をしてくれると思っていました。皆さんは分かっていないのですね。“夢”が、何のために存在しているのかを……」
　審査官たちはその言葉に対し特に反応は返さなかった。だが、ふと一人が思いついたように近くにいたシスターに尋ねた。
「先ほどのシスター、何という名のシスターなんだね？」
　問われたシスターは答えようと口を開きかけ……そのまま何も言えずに目を見開いて沈黙した。
「どうした？まさか名を忘れてしまったなどと言わんだろうね」
「えぇと、あの……、その通りです。忘れてしまいました」
「は？」
「どうしても、思い出せないんです。顔は知っているはずですのに、彼女が何という名で、どういう人間なのかが、どうしても頭に浮かばないんです。……まるで、夢の中で会った人のことを思い出そうとしているみたいに」

　何か思いつめたような顔で沈黙するシスター・フレーズを、ラウラは心配そうに見上げた。
「どうしたの？シスター・フレーズ」
「……私は、何がどうあっても他人に判断を委ねるべきではなかったのかもしれません」
「え？判断って、何のこと？審査会議のことを言ってるなら、べつに気にしないよ。シスターは、同席はしてても意見はあくまで参考にされるだけで、最終判断は結局審査官が下すものだって聞いてるし」

「そうではありません。私は、己の判断に自信が持てず、決断を島の民たちに委ねようとしました。全ての小女神（レグナース）を公平に見なければならない立場でありながら、いつの間にか、ひとりの小女神（レグナース）だけを特別な目で見ている自分に気がついていましたから……」

「え……？」

「でも結局は、島の民の判断に納得ができず、己が手で判断を下そうとしています。私の優柔不断のせいで、あなたや、アメイシャ・アメシスに余分な苦しみを与える結果となってしまいます。それでも、私にはもう、あなたしか選べません。あなたよりふさわしい小女神（レグナース）はいないと、確信してしまいましたから……」

「え？何を言ってるの？シスター・フレーズ」

「……ごめんなさい。あなたにはこれから、多大な犠牲を払ってもらわなければなりません。それでも、世界には……そして私には、あなたが必要なのです」

“犠牲” という不穏な単語にラウラの顔が強張る。

「犠牲って、何？何のことを言っているの？シスター・フレーズ」

「いずれまた、ゆっくりとお話しします。ですが、今はまだ……」

躊躇うように途中で言葉を切り、シスター・フレーズはラウラの髪を優しく撫でた。

「きっと、私があなたに惹かれた、その時点で既に答えは出ていたのでしょうね。理性や理屈よりも先に、感情が答えを出してくれることもあるのでしょう」

「シスター・フレーズ……？あなたは、一体……」

「さようなら、ラウラ。残された時間を、せめて大切に……」

シスター・フレーズはそう言い残すと、階段の方へと身を翻した。ラウラはあわてて後を追う。だが、彼女の姿は既にどこにも見当たらなかった。ラウラは嫌な予感に突き動かされ、そのままシスター長の部屋のドアを叩く。

「何ですか、騒々しい」

アルメンドラが不機嫌そうな顔で出てくる。

「シスター・アルメンドラ！シスターの部屋の場所を教えて！さっき、すごく様子が変だったの！」

「何ですって？一体どのシスターのことを言っているのです？」

「あの人だよ！シスター……」

言いかけ、ラウラはハッとした。ついさっきまで何度も呼んでいたはずの彼女の名が、なぜかどうしても頭に浮かばない。

「えっと……、えっとね、名前は忘れちゃったんだけど、あの人だよ。長い栗色の髪で……そうだ、前髪に、いちごとハートを組み合わせた形のヘアピンを留めてた……！」

「名前を忘れたとは何ですか。毎日世話をしてもらっているシスターの名前くらいちゃんと……」
　小言を言いかけ、アルメンドラはふと何かを思い出したように唇を止めた。
「ラウラ・フラウラ。あなたは先ほど、いちごとハートを組み合わせた形のヘアピン、と言いましたか？」
「え……？はい。そうですけど……」
　アルメンドラは記憶を探るように遠い目をした後、何かを否定するように首を振った。
「……いいえ、そんなはずはありませんね。私もそんな髪飾りをつけたシスターには覚えがありますが、その人があなたの言うシスターであるはずがありません」
「え？そんなことないよ。だって、シスター、審査会議にも出席してたって言ってたもん。絶対、シスター・アルメンドラも知ってる人のはずだよ」
「審査会議にいた？ならば、ますます違いますね。なぜなら私の覚えているそのシスターは、私がまだ小女神（レグナース）だった頃に小女神宮（ここ）にいたシスターです。覚えているのは、ただ一度会った時のことだけですが。ですから、あなたの言っているそのシスターと同一人物であるはずがありません。そして現在この小女神宮（レグナスコラ）にいるシスターの中で、あなたの言う髪飾りをつけたシスターは一人もいません。何か記憶違いをしているか、さもなくば……幽霊（ファントム）にでも会ったのではありませんか？」
「幽霊……？」
「ええ。小女神宮（レグナスコラ）の七不思議とやらであるでしょう？まぁ、幽霊などと言っても、時々人間の残留思念が夢粒子（レフロゥム）と反応して現れるという、幻（ファンタズム）の類なのでしょうが。夢粒子（レフロゥム）が濃く漂う小女神宮（レグナスコラ）ならば、べつに不思議なことではありません」
　シスター・アルメンドラはどこか自慢げに説明した後、反応のないラウラの顔を怪訝そうに覗き込んだ。
「ラウラ・フラウラ？」
「……どうして？シスターのこと、思い出そうとしてるのに、どんどんぼやけてく。まるで夜に見た夢を忘れていっちゃうみたいに……。こんなことって……。あの人は、一体誰だったの？」

第８章　悪夢の予兆

　夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）が決まると、島ではすぐに祭の準備が始まる。
　夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）の衣裳作りに祭の会場や沿道の飾りつけなど、準備は島民総出で行われる。そしてこの準備期間は小女神（レグナース）たちにとって年に一度の里帰りの機会でもある。小女神（レグナース）たちも家に帰り、祭の準備をする家族を手伝うのだ。

「ねぇ、本当に大丈夫なの？ずっと顔色が悪いじゃない」
　アプリコットが旅行鞄を手に、迷うようにアメイシャの顔を見つめる。
「大丈夫だと言っているだろう。朝からほんの少しだけ、腹が痛いような気がするだけだ。放っておけばそのうち治る」
「でも……」
「大丈夫だと言っているだろう。郷長（さとおさ）の娘が郷に帰らないでどうする。これ以上はもういい。さっさと帰れ」
　アメイシャは祭当日の予行演習のためずっと小女神宮（レグナスコラ）に残っていたのだが、最近はずっと体調が悪い。同室のアプリコットはそれを放っておくことができず、ずるずると里帰りの予定を延ばしていた。
「じゃあ、行くけど……本当に無理はしないでね。せっかく夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）になれたのに当日熱でも出したら大変よ」
「心配無用だ。たとえ高熱が出ようと、意地でも夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）はやり遂げる」
「そういうことを言ってるんじゃないの」
　アプリコットは真剣な顔でアメイシャをたしなめると、何度も心配そうに振り向きながらやっと小女神宮（レグナスコラ）を出て行った。その姿が見えなくなった途端、アメイシャはよろりと壁にもたれかかる。実はアプリコットの前では相当なやせ我慢をしていたのだ。
「何なんだ、一体。なぜこうも腹が痛い」
　アメイシャは舌打ちし、誰もいない部屋の中で毒づく。彼女はこの時、己の身に何が起きようとしているのか、まるで気づいてはいなかった。

「おいラウラ、こんな所で何してるんだ。鳥の巣雲が出たら海辺から離れ

なきゃいけないってことを忘れたのか？」
　フィグの声にラウラはぼんやり振り返った。純白の砂が太陽の光を浴びて淡く七色に輝くここは、夏風岬からほど近い虹砂海岸。翡翠色の海の向うには、ソフトクリームのように白く高くそびえる“鳥の巣雲”が浮かんでいる。
「まったく。嵐の精霊鳥（サンダーバード）が生まれたらどうする気だ。海岸での落雷は恐いんだぞ」
　フィグが説教をしながら歩み寄ってきてもラウラは一向に反応を返さない。フィグがラウラの正面に立って初めて、今気づいたとでも言うように声を上げた。
「あれ？フィグ、どうして私がここにいるって分かったの？」
　今までの問いかけを一切無視したその台詞に、フィグは大きく脱力する。
「お前な……。ぼーっとし過ぎだろう。どうしたんだ一体」
「うん。ここ最近いろいろあり過ぎて、頭がこんがらがってて」
　あの日以来、ラウラの頭の中のシスター・フレーズの記憶は日に日に薄れていく。最後に会った日に、とても重要で不吉な何かを聞いた気がするのに、そのことすら今はぼんやりした不安としてしか脳裏に残っていなかった。忘れたくないのに忘れていく、思い出したいのにぼんやりとしか思い出せないそれがひどくもどかしく、ラウラはここ数日、忘れそうなその記憶をつなぎとめようとするように必死に頭に浮かべては悶々としていた。
　一方、何も知らないフィグはその『いろいろ』を夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）選考会のことだと解釈していた。
「ラウラ、そんなに落ち込むなよ。お前の紡いだ夢はすごかった。他の誰が何と言おうと、俺はお前の紡いだ夢が一番だと思った」
「……見てくれたんだ。私の夢」
　ラウラの問いにフィグはただ深くうなずいた。
「私ね、今まで夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）になることを第一目標に頑張ってきたんだ。夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）になることだけを目指して、その先のことは何も考えてなかった」
　己の人生を振り返るようなその言葉に、フィグはラウラが泣き言を言い出すのだろうと思った。だが、違っていた。
「あの夢を思いついた時、私、すごく幸せだった。あの夢を見た時の皆の反応が……笑顔や涙が頭に浮かんできて、それを想像するだけで、私も幸せになれた。私の紡ぐ夢で誰かの心を動かせるかもしれない——それは、夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）になる自分を夢見るより、ずっとずっと幸せな“夢”だったんだ。結局選考会では負けちゃったけど、私あれ以来考えるんだ。この世界にはきっと、私にしか紡げない夢があるんじゃないかって。もし無かったとしても、見つけてみせる。そして、私にしか紡げない夢で、誰かを幸せ

にしたいんだ」
「それがお前の新しい夢か」
「うん。私、小女神宮（レグナスコラ）を卒業したら夢術師（レマーギ）になる。それで、誰かの心を動かして、その心に希望を芽吹かせて、その人の人生に“優しい”影響を及ぼせるような、そんな夢を紡ぎたい」
「そうか……」
　フィグはラウラのきらきらした瞳から眼を逸らした。ラウラの語る夢があまりに眩しくて、それに比べて自分の抱く現実的な将来計画があまりに小さく思えて、いたたまれなかった。幼い日の己の夢が、ちくちくとその胸を刺す。
『いつか俺は……ここよりもっと広い“果てのない”世界を旅するんだ！』
　フィグがその夢を捨てたのは、四年前。夢を叶えるために記憶の森じゅうの本を読み漁り、聞けるだけの大人たちに話を聞き、試せる限りの夢術を試し、それでもこの島の外へ行くことが叶わないと知ってしまった時だった。
　夢を叶えようと知識を増やせば増やすだけ、「それは不可能なのだ」とその知識が思い知らせてくる。実際、今までの島の歴史上、フィグより知識も能力もある島民が何人、何十人と島の外へ出ようと挑戦しているが、成功した者は一人もいない。
　夢を叶える術を見失い、絶望と空しさに襲われ疲れ果てたフィグが選んだのは、夢を諦めることだった。それまで焦がれるほどに切望し、人生のほとんどを捧げてきた夢を捨て、現実的で手の届く夢を新しく見つけることだった。だが、捨てたはずのその夢は今でもフィグの心の奥にくすぶり続け、時々こうして胸を刺す。まるで捨てられたことへの復讐のように。
「どの夢術師（レマーギ）の所へ弟子入りするにしろ、卒業後は流星の谷行きってことだな。俺は鉱石谷で修行することになるから、どっちみちまた離れ離れになるな」
　うつむいた唇から零された言葉にラウラは目を見開いた。
「え？なんで？鉱石谷ってことは、夢鉱技師（レマイスタ）になるってこと？フィグも夢術師（レマーギ）になるんじゃなかったの？……あ、そうか！今までに夢術（レマギア）で成功した人がいないから、夢鉱機械で試してみるつもりなんだね。さすがフィグ。目のつけ所が違……」
　いかにも彼女らしく、ラウラはフィグの言葉に勝手に前向きな解釈をつけ始める。それを遮りフィグは声を上げた。
「そうじゃない。もう諦めたんだ。この島の外へ出ることは」
　ラウラは凍りついたようにぴたりと口をつぐんだ。その瞳が戸惑うように揺れ、無言でフィグに向けられる。フィグは逸らした目を戻せないまま、何も言えずに唇を閉ざしていた。ラウラはためらうように何かを言いかけては止めた後、無理矢理のようにぎこちない笑みを作って言った。

「……そっか。そうなんだ。すごく、残念」
　その言葉に、逆にフィグは戸惑った。
「言わないのか？『諦めたらダメ』だとか、『やればできるはずだよ』とか」
　思わず『ラウラが言いそうなこと』を並べて問うと、ラウラは静かに首を振った。
「言えないよ。だって、夢を追うのがどんなに大変なことなのか、私はもう知ってしまっているもの。楽しいことばかりじゃない。傷ついて、ボロボロになるまで努力して……それでも報われなくて、目の前で夢が破れていく辛さを、もう知ってしまっているもの。それなのに『諦めるな』なんて、そんなこと、私には言えない。夢を叶えるのは結局その本人にしかできないことで、その辛さも、苦しさも本人にしか分からないことだもの」
　本当は、悲しくてたまらなかった。フィグの夢はラウラの夢でもあったのだから。けれど今のラウラには、その夢を諦めざるを得なかったフィグの苦しみが容易く想像できてしまう。自分もその苦しみを味わったばかりだからだ。だから、それまで心の支えにしてきた幼い約束が儚く砕けた痛みを胸に隠し、ラウラは微笑み続ける。
　その微笑みと言葉に、フィグはハッとして己の発言を悔やんだ。
「……すまない」
「ううん。フィグが謝ることじゃないよ」
　ラウラはそう言って寂しそうに微笑（わら）った。そして、フィグが今まで見たことのない静かな、まるでもう何十年も生きてきた賢者のような瞳でこちらを見つめてきた。
「でも、フィグは本当に、島の外へ出る夢を諦められたの？」
「それは……」
「自分の全てを注いで追いかけてきたような夢って、一度や二度破れたくらいで胸の中からいなくなってくれるほど、生やさしいものじゃないでしょう。諦めたフリをしても、別の夢を追いかけようとしても、ずっと心の奥に刺みたいに突きささって忘れられない、そういうものじゃない？」
　あまりにも自分の心の内を言い当てられて、フィグは何も言えなかった。同時に悟る。ラウラもまた、簡単に新しい夢へ踏み出せているわけではないのだと。
「あのね、たとえ叶わなくても、他人に嘲笑（わら）われるほど無謀な夢だとしても、持ち続けていいと思うんだ。それはきっと無意味なことなんかじゃないよ。よく、夢を星に例える人がいるでしょう。何とかの星を目指せ、みたいなの。あれって本当だと思うんだ。夢って、夜空に光る北極星（ポラリス）なんだよ。旅人を導くように、人生の行き先を照らす道標なんだよ。だから、見失ってしまったら自分がどこへ向かっていったらいいのか分からなくなって、途方に暮れちゃうんだよ。手の届かない遠い目的地でも、無いよりはマシだし、そこに辿り着くことだけが全てじゃないよ。星には届かなくて

も、歩いているうちに自分が本当に居心地が良いと思える場所に辿り着けるかもしれないから」
　目の前の小女神（レグナース）を、フィグはまるで初めて見る相手のように見つめる。それはフィグの知っていたラウラ──否、知っていると思っていたラウラではなかった。ラウラが急に、手を触れてはいけない、ひどく尊い存在になってしまったような気がして、フィグは焦った。気づいたら、手を伸ばしていた。
「え……」
　小さな声とともに、ラウラの身体がフィグの胸に倒れ込む。
　無理矢理引いた手をそのまま握り込み、フィグは自分がどうしたいのかも分からぬまま、ラウラの顔をのぞき込む。その視線と沈黙に、ラウラはあからさまにうろたえる。
「あ、ああああ、あのね、フィグ。フィグのことは好きだし、将来結婚してもいいって思ってるけど、でも私、まだ小女神（コドモ）なんだよ。そ、そういうのは、いろいろと早いって言うか……」
　混乱の極致にあるラウラは、自分がうっかり何を言ってしまっているのかもまるで分かっていない。一方、フィグはラウラのその反応から、自分が何をしたかったのかを悟った。
「べつに小女神（コドモ）だってキスくらいはしてもいいだろ」
「な、何言ってんの!?」
　ラウラの顔が一瞬で赤く染まる。その顔にフィグはぎこちなく自分の顔を近づけていった。
　そうして触れてしまえば己の所有物（モノ）にできるなどと、そんな考えで行為に及ぼうとしたわけではない。ただ、そうでもして引きとめておかなければ大変なことになってしまいそうな、そんな昏く嫌な予感がフィグを衝き動かしていた。
　熱い吐息が唇にかかり、ラウラはぎゅっと目を閉じた。フィグは残ったわずかの距離を詰め、その唇に触れようとした。だが──できなかった。
「ひゃあぁぁあっ!?」
　二人の行為を咎めるように突然鳴り響いた雷鳴に、ラウラは悲鳴を上げフィグから身を離した。フィグも身を強張らせて水平線の方を見つめる。
　にわかに黒雲の集まりだした空では、今まさに鳥の巣雲を突き破り、全身にプラズマの光をまとった巨鳥が生まれ出ようとしていた。風雨を呼び寄せ雷を巻き起こす精霊の鳥 “嵐の精霊鳥（サンダーバード）” だ。その翼が羽ばたくたびに雷鳴が轟き、金色（こんじき）の瞳からは光線のように稲妻がほとばしる。
「まずい！こっちへ来る前に逃げるぞ、ラウラ！」
「うん！」
　つないだ手をそのままに、二人は夏風岬へ向け駆け出した。

　逃げている間にも黒雲はどんどん量を増し、やがて空一面を覆いつくす。闇夜のように暗くなった空からは土砂降りの雨が降り始めた。会話を交わす暇も何かを考える余裕もなかった。
「じゃあね、フィグ。また明日、お祭で！」
　雷鳴にかき消されぬよう大声で叫び、びしょ濡れのまま家へと飛び込んでいくラウラに、フィグは大きくうなずいてみせた。どんなに激しく荒れ狂う嵐でも、一晩経てば嘘のように消え去る。二人はそれを知っていた。そして、信じて疑っていなかった。明日、ともに祭の日の朝を迎えることを。だがこの時、既に事態は大きく変わろうとしていた。

　世の全てに絶望するかのような悲鳴が、小女神宮（レグナスコラ）に響き渡った。
　駆けつけたシスターたちの目に映ったのは、顔を覆い信じられないというように首を振る一人の女の姿。そしてその純白の衣を裾からじわじわと染めていく、血のような赤い色。シスターたちは誰もがすぐに事態を悟り、顔面を蒼白にして立ち尽くした。
「なぜだ。こんなことがあって良いのか？祭はもう明日だというのに……」
　女は女神へ呪いを吐くように天へ向け恨み言を叫び続ける。
「誰か……！早く流星の谷へ連絡を！審査官の皆様においで頂いて判断をあおがねば……！」
　シスターたちは青ざめた顔のまま、あわただしく動き始める。シスターに抱きかかえられるようにして歩き出した女は、一瞬振り返って部屋の片隅を見つめた。そこには明日の祭で使われるはずの夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）の衣裳が、薄闇に染まり始めた部屋の中でほのかな光を宿し輝いていた。

　夏風岬の嵐は深夜になっても止まずにいた。
　フィグは窓辺にもたれ、ぼんやりと黒天に舞い飛ぶ嵐の精霊鳥（サンダーバード）の姿を眺めていた。昼間のラウラとのことが神経を昂ぶらせ、眠れる気分ではなかったのだ。
　その時、フィグはふと異変に気づいた。時折雷光により青白く染め上げられる大地に、亡霊のように白くひらひらとうごめくものが見える。目を凝らしてその正体に気づいた瞬間、フィグは戦慄した。
　雨除けの白い外套（コート）に身を包んだ幾人ものシスターたちが、ラウラの家の方へと歩いていく。それは八年前に見たのと全く同じ光景だった。

「なぜだ？なぜ今更また、小女神宮（レグナスコラ）からの使者が来る!?」

　突然の訪問者に戸惑ったのはフラウラ家の人間たちも同じだった。
「あの……こんな夜分遅くに、一体何のご用件でしょう」
　不安げに問うラウラの父にシスターの一人が無表情に告げる。
「我々は小女神（レグナース）ラウラ・フラウラ様をお迎えに参りました」
「は？ラウラが祭のお手伝いに上がるのは、明日のお昼前のはずでは……」
「手伝いとしてではありません。我々はラウラ・フラウラ様を“夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）”としてお迎えに上がったのです」
　カタン、と奥の部屋につながるドアが開き、ネグリジェ姿のラウラが強張った顔で現れた。
「それ、どういうこと？夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）はメイシャちゃんに決まったじゃない」
「本日の夕刻、小女神（レグナース）の衣（ローブ）がアメイシャ・アメシスの資格喪失を告げました。よって、選考会で次点をとられたあなたが、新たな夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）に選定されたのです」
　今までとは違う、まるで女神（レグナリア）その人に対するような恭しい態度で、シスターたちはラウラの前に膝まづく。
「資格喪失？小女神（レグナース）の衣（ローブ）？それって……」
　言いかけ、ラウラはハッと気づいた。
　小女神（レグナース）が必ず身につけさせられる純白の“小女神（レグナース）の衣（ローブ）”には、一つの重要な機能が付与されている。それは小女神（レグナース）の肉体（からだ）の変化に反応してその色を変化させるというものだ。たった一つのその機能が知らせるものは……。
　ラウラは「まさか」という顔でシスターたちを見る。シスターたちはうなずいて告げた。
「アメイシャ・アメシスは初潮を迎え、小女神（レグナース）ではなくなりました。よって、夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）になることはできません」

「我々は、間違っておったのかのう？」
　洋燈（ランプ）の明かりの揺れる小女神宮（レグナスコラ）の一室で、審査官の一人が重苦しい声で

訊いた。
「そもそも我々が選ぼうとしていたこと自体が誤りだったのですよ。『真の夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）は女神（レグナリア）の御手により選ばれる』――古よりの伝承の本当の意味がやっと分かったような気がします。夢見の娘に選ばれた小女神（レグナース）が祭の前に資格を失うなど、前代未聞のこと。しかも、不吉な兆の多く現れているこの時期に、です。これはとても偶然とは思えません」
「左様。これは偶然などではない。女神（レグナリア）の御意思と見なすべきだ。我々の選んだ候補を女神はお認めにならなかった。それゆえ、このような形で御意思を示されたのであろう」
「これは我々の驕りが招いた結果じゃ。己の価値観を絶対と信じ、いつの間にか目をくもらせてしまっていたのじゃ。島の民たちの方がよほど確かな目を持っていたということよ」
「しかし、こうして女神の御手による介入があった以上、最早時が来るのは確実ということですな」
「ああ。備えねばならぬ。島は荒れるぞ。……悪夢の宴の始まりだ」

第９章　悪夢の宴

　祭の日の朝は早い。夜明けと同時に島中の夢術師（レマーギ）及びその弟子たちが一斉に夢晶体（レクリュスタルム）を紡ぎ出し、野に放つ。
　腕によりをかけ紡ぎ出された夢晶体（レクリュスタルム）たちは普段とは異なり、祭の日が終わるまで溶けて消えることはない。
　夢追いの祭は特別な一日。一年のうちで最も夢見の女神（レグナリア・レヴァリム）の影響力が強まる日だ。島の大気中には常より濃い夢粒子（レフロゥム）が漂い、この日だけは夢雪（レネジュム）を使わなくても、ただ杖を振るだけで夢晶体（レクリュスタルム）を紡ぎ出すことができる。島で夢術（レマギア）を使えるありとあらゆる者が好きに夢晶体（レクリュスタルム）を紡ぎ出し、島は一日中、夢幻の生物や美しい幻想で溢れかえる。
　だが、この祭の何よりの目玉は、まるで女神（レグナリア）そのもののように美しく着飾った夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）のパレードだ。
　正午になると同時に小女神宮（レグナスコラ）を出発するパレードは、クリスタルガラスでできたクラシックカーに、虹色の蝶の群れが運ぶ花の輿、天馬（ペガサス）と一角獣（ユニコーン）が引く宝石細工の馬車と次々に乗り物を変え、夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）の紡ぐ夢晶体（レクリュスタルム）を引き連れて島中を巡るのだ。

「フラウラさん、もうちょっと頭下げて。……うん、そう。じゃあ載せるわよ」
　綺麗に整えられたラウラの髪の上に、ミルククラウンのような形をした透明な宝冠（クラウン）が載せられる。女神の涙と呼ばれる聖なる泉の水面に水滴が落ちた瞬間を、雪の女王の吐息により一瞬で凍らせ、特殊な断熱加工を施した“涙珠宝冠（ティアドロップ・クラウン）”だ。
　耳には“貴婦人の耳飾り（レディス・イヤードロップス）”の異名を持つ優美なフクシアの花を飾り、首にはカスミソウと淡水真珠（パール）で編まれた繊細で儚げな印象のラリエットを巻く。足に履くのは、硝子のような光沢と透明度がありながら、同時に絶妙な弾力と伸縮性をあわせ持つ“晶竜（クリスタル・ドラゴン）の鱗”の革靴だ。
　そしてその身にまとうのは“空織のドレス”。島の南西“空鏡塩原（ヘヴンズミラー・ソルトフィールド）”で採れる“空映しの水”に丸一日浸した糸を使い、地平線まで続く広い草原の大きな空の下、数十人がかりで織り上げられたそのドレスの布地は、昼は澄んだ天空の青（セレスト・ブルー）に白い雲模様、夕方は燃えるような夕焼けの茜色、夜は濃紺から黒のグラデーションに金銀の星のラメと刻々とその色と模様を変えていく。その時々の空模様を生地の上に浮かび上がらせる特殊なドレスなのだ。
　多くの島民の手をかけて作られたこれら夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）の衣裳は、夢追いの祭のただ一日のためだけに用意されたもの。祭が終われば全て炎に投じられ、女神の元へ還される運命にある。
「……よし！いい感じだわ。即興でやったわりには我ながら良い出来ね。ドレスの方も何とか見映えが良く

なったし」
　衣裳の着付け及びヘアメイク担当のマリアン・カリヨンがやや遠くからラウラの全身を眺め、満足そうに頷いた。
「でも、少しバランスが悪い気がします。リリアン、左肩の所、リボンを追加してみてください」
　衣裳のデザイン担当であるミリアン・カリヨンが冷静に指示を出す。
「はいはーい。でもぉ、私としては肩だけじゃなくてもっとあちこちにリボンとかレースとかフリルとか、ゴージャスに縫いつけたいんだけど」
　縫製の総責任者リリアン・カリヨンが縫い針を手に伺うように姉（ミリアン）を見る。
「ダメです。夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）の衣裳は島の古い文献を元に、夢見の女神（レグナリア・レヴァリム）の最古の衣裳を再現したもの。多少のアレンジは許されても、あまりゴテゴテ盛り付けては女神の清楚なイメージを損なってしまいます。それに、もう時間もそれほど無いでしょう」
　言ってミリアンはちらりと柱時計に目をやった。
「え……っ、うそっ、もうこんな時間!?やばっ、私としたことが衣裳のサイズ変更ごときでこんなに時間をとられるなんてっ」
「まぁ、それは仕方が無いでしょう。サイズだけでなく、フラウラさんの印象に合わせてデザインも多少変更しましたし」
　既に用意されていた夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）の衣裳は、全てアメイシャをイメージしてデザイン及び製作されたものだ。当然ラウラにはサイズが合わず、デザインも大人っぽ過ぎてラウラには似合わない。それを何とか調節するために、夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）の衣裳に係わるカリヨン三姉妹が早朝から集まって作業を続けてきたのだ。
「あの……、いろいろとすみません。朝早くからご迷惑をかけて……」
　ラウラが恐縮して頭を下げると、マリアンは軽く顔をしかめてみせた。
「こら、ダメよ。あなたは今日は女神の娘（フィーユ・レグナリア）なんだから、そんな顔してちゃダメ。それにあなたのせいじゃないもの。謝る必要なんて無いわ」
「そうそう。あんたは余計なことなんて考えずにパレードにだけ集中してなさい。それに、これはなるべくしてなったことだって私は思うわ。アメイシャよりあんたの方が夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）にふさわしいって、私は今でも思ってるし」
　マリアンの言葉に同意するように何度も深く頷きながら入室してきたのは、普段のラフな格好とは違い、純白のワンピースの上にきっちりとローブを着こなしたキルシェ・キルクだった。
「……キルシェちゃん、それに、アプリちゃんも……」
　アプリコットもキルシェと同じ姿でこちらに歩み寄ってくる。二人は今日は夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）の介添役として一緒にパレードを巡るのだ。本来であればラウラも同じように介添役としてアメイシャのパレードに同行するはずだったのだが……。
「アプリちゃん……メイシャちゃんは、大丈夫？」
　ラウラは硬い声で問う。キルシェとアプリコットは何とも言えない表情で顔を見合わせた。
「……ショックを受けて部屋に引き籠もっているわ。アメイシャの性格からして、私たちから慰めの言葉なんて欲しくはないでしょう。今はそっとしておいてあげて」
　ラウラは無言でうなずく。夢に見た夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）になれたというのに、胸を満たすのは複雑な思いばかりで、喜びも嬉しさも一向に湧いて来ない。
「もうっ！辛気臭いのはやめにしましょ！私たちが凹んでたところでアメイシャのことはもうどうにもならないんだから。それよりスマイルよ、スマイル！祭の主役、夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）がそんな顔しててどうするの！」
　キルシェがその場に漂う重い空気を吹き飛ばすように明るく言う。

「うん。そうだよね。ピンチヒッターでもちゃんとやらなきゃ、お祭を楽しみにしてる皆に悪いもんね」
「それじゃあ行きましょう。もう準備はできているわ」
　アプリコットが色とりどりの絹リボンで飾られたラウラの銀の匙杖（シルヴァースプーンワンド）を渡してくる。ラウラはそれを、ややぎこちない笑顔で受け取った。

「夢より紡ぎ出されよ！ “めくるめく四季” パレード・バージョン！」
　ラウラが銀の匙杖（シルヴァースプーンワンド）を振ると、杖の先から色とりどりの花々が飛び出してきた。それらは互いに茎と茎を絡ませ合い、ひとりでに花冠となって沿道の人々の頭の上にふわりふわりと載せられていく。ラウラの好きな “春” の姿だ。
　次いでラウラが杖を振ると、今度は先端から瑞々しい若葉の群れが飛び出してきた。パレードを囲むように一面に広がった緑の葉のカーテンには、まるで水面に反射した日光のような、涼やかな金の波模様が描かれる。
　ラウラはパレードの進行に合わせ、何度も杖を振る。そのたびに杖の先から出るものは変化していく。
　若葉の次には錦絵のように色鮮やかな紅葉、その次には陽光にきらめくダイヤモンドダスト。そしてその後は再び花の冠。全てラウラが四季の光景の中で “好きなもの、綺麗だと思ったもの” だ。沿道の人々は歓声を上げてラウラの紡ぐ夢に見惚れた。だがその中に、その夢術（レマギア）から目を逸らすようにうつむく者がいた。小女神宮（レグナスコラ）の部屋をこっそり一人で抜け出したアメイシャ・アメシスだ。
　彼女は目深にかぶったフードの下で唇を噛みしめる。我慢できず見には来たものの、その胸にはやはり昏い感情しか湧いてはこなかった。本来であれば、あの場で喝采を浴びているのは彼女のはずだったのだ。
　アメイシャはうつむいたまま人の輪からそっと離れる。どこか静かな所、祭の喧騒の届かぬ所へ行きたかった。

　流星の谷はその大部分が、大小さまざまの湖沼に占められている。見ていると吸い込まれそうなほどに深く澄んだ青い湖沼の合間に、まるで麝香瓜（マスクメロン）の網目のように細かく複雑な白亜の道が伸びている。水辺に建つ夢術師（レマーギ）たちの塔は、淡く漂う白霧の中、まるで水の上に浮かんでいるようにも見えた。
　既に日は暮れ、谷の上空には星くずを集めたようにちらちらと発光する、ヴェールのような薄い雲がかかっていた。そこからは時折、谷の湖水を目がけて星くずの雨が零れ落ちる。それはシャラシャラと貝殻がこすれるような軽やかな音を立てながら夜空を滑り、きらきら輝いたまま水の底へと沈んでいく。

　夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）のパレードは谷の中央にある広場に辿り着いていた。光る花で飾り付けられた広場には、多くの島民が詰めかけフィナーレの時を待っている。
　やがて広場の中心に、１０１匹の長靴（ロングブーツ）を履いた猫を従えたカボチャ型の馬車が到着する。貴金属と宝石で造られた馬車の扉が猫達の手で恭しく開かれると、夕闇色のドレスに身を包んだラウラが、介添役のキルシェとアプリコットに手を引かれて現れた。
　ラウラが馬車から降り立つと、広場に控えていた夢術師（レマーギ）たちが一斉に杖（ワンド）を振る。杖の先から放たれたのは宙に浮かぶ幻の灯りだ。会場が一気に明るくなり、人々は歓声を上げた。祭の最後を締めくくる夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）の夢術（レマギア）ショーの始まりだ。ラウラは舞台の中央に進み出ると、緊張した面持ちで杖を振り上げ唇を開いた。
「夢より紡ぎ出されよ、思い出の……」
　しかしラウラは最後まで言葉を紡ぐことができなかった。その目が一点へ向けられ、大きく見開かれる。異変を察しラウラの視線を目で追った観客たちは次々に悲鳴を上げた。
　白く輝く幻の灯りに照らされるのは、黒く澱んだ不気味な夢晶体（レクリュスタルム）の群れ。広場はいつの間にか、黒い泡をまとわりつかせた得体の知れないモノたちに囲まれてしまっていた。
「身より吹き出す黒い泡……。間違いない。“悪夢（コシュマァル）”じゃ。やはり始まってしまったのじゃ」
　夢術師（レマーギ）の一人が顔を覆い呻くように呟く。

「奴らの狙いは夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）だ！決して奴らを近づけさせてはならん！」
「観客の皆さん！あれに触れてはいけません！逃げてください！」
　夢術師（レマーギ）たちがヒステリックに騒ぎだす中、キルシェとアプリコットはラウラを庇うように前に出て銀の匙杖（シルヴァースプーンワンド）を構えた。
「あれが“悪夢（コシュマァル）”……。この目で見ることになるなんて……」
「何？アプリ、アレのこと知ってんの!?」
「シスター・アルメンドラに聞いたことがあるの。この島では数百年に一度、女神様の夢見の力が不安定になる時期に、ああして悪夢（コシュマァル）と呼ばれるモノが現れて、島の形を“歪めて”いくのだそうよ」
「“歪める”!? 何、ソレ。どういうこと!?」
　悪夢（コシュマァル）たちはじりじりとこちらに迫ってくる。その身から絶えず湧き上がり続ける黒い泡が、宙に浮かぶ幻の灯りの一つに触れた。途端、眩く輝いていた灯りは怪しく明滅する鬼火に姿を変えた。人々は再び悲鳴を上げ、少しでも悪夢（コシュマァル）から距離をとろうと後ずさる。
「……なるほど。アレに触れるとヤバイってわけね。でも逃げろったって、四方を囲まれちゃってんのに、どこに逃げろって言うのよ」
「戦って道を開く以外に方法は無いと思うわ。私の夢術（レマギア）でどこまでできるか分からないけど……」
「ちょっとアプリ、戦う前から弱気にならないでよ。幸いここは流星の谷。これだけ夢術（レマギア）の使い手がそろってるんだから、何とかなるでしょ」
　キルシェはわざと明るい声で笑う。だがその口元は隠しようもなく引きつっていた。

　キルシェや夢術師（レマーギ）たちが悪夢（コシュマァル）との戦いを始める中、観客たちも必死に悪夢（コシュマァル）と格闘していた。夢術（レマギア）を使える者は杖やその代わりになるものを振り、使えぬ者は夢鉱器械（レムストーン・マシヌリィ）を使ったり物を投げつけたりして応戦する。その中にはパレードのフィナーレを見に来ていたフィグたちの姿もあった。
「夢より紡ぎ出されよ！……えっと、猟銃！」
　カリュオンが腕を振り回すと、何も無かった虚空から一丁の猟銃が落ちてきた。カリュオンはすぐさまそれを肩に抱え上げ、照準を合わせる。だが放たれた銃弾は悪夢（コシュマァル）の群れにかすりもせず、広場を飾る花の一つに当

たり、その花びらをはらりと散らした。
「おっ前、何でこの場面で何の変哲もないただの猟銃だよ？いつもながら変に現実的だな。夢術（レマギア）なんだからもっとスゲェ武器紡げばいいだろ？」
「うるさい！だったらお前が紡げよ！将来夢術師（レマーギ）になるんだろ!?」
「もちろん紡ぐさ！見てろよ！……夢より紡ぎ出されよ！“俺・デザインロボット第２８号”その名も“ドリルンガー”！」
　リモンは背に負っていたシャベルを、まるで大剣を振り下ろすかのように大袈裟に振り下ろした。辺りの空気が白銀にきらめき、直後目の前に全長３ｍほどのロボットが出現した。両腕にドリルを装着したどこかアンバランスなそのロボットは、前へならえのような姿勢で悪夢（コシュマァル）へ向け突進していく。
「おおっ、すげぇ。デザインは五歳児並だけど威力はありそうじゃん」
　カリュオンは思わず猟銃を下ろしてロボットの行方を見守る。しかしロボットは徐々にスピードを落としていき、やがて悪夢（コシュマァル）に到達する前に止まってしまった。よく見てみると、その背には巨大なゼンマイが刺さっており、それがギィギィ音を立てながらゆっくり止まろうとしている。
　カリュオンは思わず真顔でリモンを振り返っていた。
「…………リモン、いろいろとツッコミたいことはあるが一つだけ訊く。何でゼンマイ式にしたんだ」
「だってさ、ガソリンも電気も使わずに動くんだぜ。すっげぇエコじゃん！」
「天然か！天然ボケなのか!?」
「……ちょっと二人とも、ふざけてないで真面目にやってくれないかな。このままだと本気でアーちゃん……アプリ様たちがピンチなんだけど」
　ビルネが物腰は穏やかなまま、その声音だけを限りなく低くして二人を諌める。普段滅多に怒らない友人の静かな怒りを感じ取り、二人は一気に硬直した。
「使いこなせない武器や相手に届かない兵器じゃ駄目だ。確実に奴らを仕留められるものじゃないと。……夢より紡ぎ出されよ！伝説の弓手（アーチャー）“ウィルヘルム＝テル”、『平家物語』より“那須与一宗高”！」
　ビルネが叫ぶと白銀の光が弾け、目の前に伝説の弓の名手が二人現れた。背中合わせに立ったウィルヘルム＝テルと那須与一は、交互に矢をつがえ、悪夢（コシュマァル）へ向け寸暇も無く弓弦を弾き続ける。ひゅふ、と風を切り放たれたその矢は、青闇に染まり始めた空になめらかな弧を描き、確実に悪夢（コシュマァル）の一体一体を射抜いていく。
「なるほど、百発百中の武器か」
　フィグはひとり言のように呟くと、カリュオンの方へ向き直った。
「おい、カリュオン。その猟銃を貸せ」

「え？いいけど。お前そんなに銃の腕前あったっけ？」
「腕前なんてあろうがなかろうが１００％当たるようにすればいいんだ。夢より紡ぎ出されよ！歌劇（オペラ）『魔弾の射手』より“猟魔ザミエルより与えられし魔弾”！」
　フィグは人差し指で空を掻く。するとその軌道をなぞるように宙に白銀の光の帯が現れ、やがてそれが七つの光の珠に凝縮されていった。フィグが両手を差し出すと、光の珠は七つの弾丸に変わり、その手のひらの上にぽとぽとと転がった。
　フィグはすぐさまその弾丸を猟銃に込め、引鉄を引く。白銀の光を振りまきながら飛び出した弾丸は、通常ならあり得ないような軌道を描き、何体もの悪夢（コシュマァル）を同時に撃ち抜いた。
「フィグ！分かってると思うけど、七発目は絶対に撃っちゃ駄目だよ！」
「分かってるさ。歌劇と同じ間違いは犯さない。最後に射手を裏切る七発目さえ撃たなければ、あとの六発は無敵の魔弾なんだからな」
　フィグは悪夢（コシュマァル）から目を逸らさぬまま答えを返し、猟銃に二発目の弾丸を装填した。

「へ～っ、島の男子たちも意外にやるじゃん。なるほど、飛び道具ね。いい選択だわ」
　遠目からフィグたちの活躍を見ていたキルシェは感心したように小さく頷く。アプリコットはウィルヘルム＝テルと那須与一の後方にたたずむビルネに目を向け、そっと頭を下げた。
「ルネ君……。ありがとう」
「よっし！私たちも負けてらんないね！行っくぞ！」
　気合を入れるように掛け声を上げてから、キルシェは銀の匙杖（シルヴァースプーンワンド）を大きく振り上げた。
「夢より紡ぎ出されよ！“鉛の兵隊”！」
　キルシェは振り下ろした匙杖（スプーンワンド）の先端を悪夢（コシュマァル）に向け、真っ直ぐに右腕を伸ばす。直後、匙杖（スプーンワンド）の先端から銃声のような音と白銀の光が連続して放たれた。マシンガンのような勢いで次々と匙杖（スプーンワンド）の先から飛び出してきたのは、銃剣を手にした鉛製の兵隊人形の群れだった。
　鉛の兵隊たちはけたたましい突撃ラッパの音とともに鉛弾のように宙を駆け、悪夢（コシュマァル）に突っ込んで行く。その勢いに悪夢（コシュマァル）の群れは一瞬怯んで後ずさったかのように見えた。

だがその時、その動きに反するように一体の悪夢（コシュマァル）が群れの中から進み出た。それは身から吹き出す黒い泡を、まるで総レースの黒いロングドレスのように全身にまとった一人の女性だった。彼女は黒くまだらに変色した匙（スプーン）型の杖を振り上げ、静かに唇を開く。
「悪夢より紡ぎ出されよ、“地獄の業火（タワーリング・インフェルノ）”」
振り下ろされた杖の先から、炎の渦が吹き出し兵隊人形たちを呑み込んでいく。炎はそれだけに留まらず、辺りを火の海に変えながら、夢術師（レマーギ）や島民たちが悪夢（コシュマァル）に対抗するために紡ぎ出した夢晶体（レクリュスタルム）のことごとくを焼き尽くしていく。彼女は業火に消えていく夢晶体（レクリュスタルム）の群れを冷たく見つめ、薄く笑った。禍々しい炎に照らされたその姿を見て、ラウラたちの顔色が変わる。
「あれは……まさか、メイシャちゃん……？」
「え……？どうしてアメイシャが？まさか、既に悪夢（コシュマァル）に呑み込まれてしまっていたと言うの？」
「嘘でしょ？アメイシャが敵に回るなんて……。百年に一人の天才相手にどう戦えってのよ!?」
業火は夢術師（レマーギ）たちの紡いだ大量の水属性の夢晶体（レクリュスタルム）によりすぐに消し止められたが、アメイシャは全く動じることなく再び杖を振り上げる。
「悪夢より紡ぎ出されよ、十六小地獄より“剣林地獄”」
振り下ろされた杖の先で地面が割れ、剣の葉を持つ銀色の木が次々と顔を出す。それは人々を串刺しにしようとするように、一斉に倒れかかってきた。
「夢より紡ぎ出されよ！故事成語『矛盾』より“何ものも突き通せぬ盾”！」
アプリコットが叫んで杖を振ると、巨大な盾が空中に出現し、降りかかる剣の葉をことごとく弾き返した。
「あっぶなかったー……。サンキュー、アプリ」
「礼を言われるようなことじゃないわ。でも、どうしましょう。アメイシャが相手では生半可な攻撃は通用しないわ」
「て言うか、下手なものを紡いだんじゃ、逆にあっちに取り込まれて向こうの戦力にされちゃうみたいなんだけど」
キルシェは強張った顔で周囲を指差す。広場では相変わらず、夢術師（レマーギ）や島民たちがそれぞれ必死に悪夢（コシュマァル）と戦っていた。だがどんな夢術（レマギア）も夢鉱器械（レムストーン・マシヌリィ）も、悪夢（コシュマァル）の群れに決定的なダメージを与えてはいない。それどころか攻撃に失敗した夢晶体（レクリュスタルム）たちが次々と悪夢（コシュマァル）に呑み込まれ、変質し、逆にこちらに向かって来るという皮肉な結果を生み出していた。
「悪夢（コシュマァル）を一網打尽にできるような武器とか、何かないかな。えっと……」

「神話級（クラス）の武器や技だったらどうかしら。特に神々の使う雷撃系の技は威力が強いと思うのだけれど」

「でもソレ、下手すると広場ごと吹き飛んだりしない？」

　悪夢（コシュマァル）へ向け油断なく杖を構えながら、キルシェとアプリコットは相談を続ける。ラウラはずっと押し黙ったまま、困惑した表情でそれを聞いていた。その目はじっと何かを探るように悪夢（コシュマァル）の群れに向けられている。

　悪夢（コシュマァル）の群れは一心にラウラを見つめ、もがくようにその手を伸ばしていた。それは夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）を害そうとしていると言うよりも、まるで必死に助けを求めているようにも見えた。ラウラはその視線をゆっくりとアメイシャへ移す。アメイシャは変わらず酷薄な笑みを浮かべ、悪夢のような夢晶体（レクリュスタルム）を紡ぎ続けている。だがその眦に一瞬きらりと光るものを見た気がして、ラウラは息を呑んだ。

「よし！じゃあ、とりあえずその路線でやってみようか。神話系はあんたの方が詳しいから任せるわ、アプリ！」

「ええ。じゃあ行くわ。夢より紡ぎ出されよ“インドラの……”」

　相談を終え、武器となる夢晶体（レクリュスタルム）を紡ぎだそうと銀の匙杖（シルヴァースプーンワンド）を振り上げるアプリコットを、ラウラはあわてて止める。

「アプリちゃん、待って。メイシャちゃんたちを攻撃しないで。メイシャちゃんも、悪夢（あのこ）たちも、皆泣いてる。本当は私たちに救いを求めてるんじゃないかな」

「は？何言ってんのよラウラ。攻撃しないとこっちが危ないでしょ」

「アメイシャのことを心配しているの？大丈夫よ。アメイシャの命に危険が及ばないよう、細心の注意は払うわ。でも気絶させるくらいのことはしないと、こちらが危ないの」

　不思議そうな顔を向けてくる二人に、ラウラは激しく首を横に振った。

「違うよ！攻撃じゃダメなんだよ！攻撃されたからって攻撃し返しても、悪夢（あのこ）たちを増幅させるだけな気がする。それじゃいつまで経っても悪夢は終わらないよ」

「え？じゃあどうしろってのよ？このまま黙って悪夢（コシュマァル）に呑みこまれろっての？」

　キルシェの言葉に、ラウラは再び首を横に振る。

「ねぇ、夢術（レマギア）って、夢を紡ぐためにあるものでしょ？だったら攻撃じゃなくて、もっと違うやり方があるはずだよ。きっともっと優しい方法で、悪夢（コシュマァル）を消すことができるんじゃないかな」

　ラウラが静かに訴えたその時、ふいにその耳元を一陣の風が通り抜けた。

『――そう。“悪夢”に対し、どんな武器を振るったところで意味はありま

せん。悪夢（コシュマアル）とは、人間の不安や絶望やストレスが顕在化した、実体の無いモノ。戦って打ち消せる類のものではないのですから』
　風に乗って届いたその囁きは、ひどく懐かしい声をしていた。
「シスター……フレーズ……？」
　閃くように思い出したその名を驚いたように唇に乗せ、ラウラは目を見開く。
『考えなさい。真なる夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）、ラウラ・フラウラ。あなたになら分かるはずです。何が悪夢を打ち消すのかを。そして、紡ぎなさい。あなたにしか紡げぬ夢を――』
　ふいに黙り込んだラウラを、キルシェとアプリコットが怪訝な表情で見つめる。そんな二人の前で、ラウラはぱっと顔を上げた。その瞳は、逃げ場もなく悪夢（コシュマアル）の群れに囲まれた絶望的な状況になどまるで似つかわしくなく、明るく輝いていた。
「分かった！悪夢を打ち消すもの！」
　ラウラは銀の匙杖（シルヴァースプーンワンド）を握りしめ、悪夢（コシュマアル）の群れの前へと駆け出していく。
「ちょっと！何してんのラウラ！危ないよ！」
　キルシェの制止を振り切り、ラウラは笑って答えた。
「大丈夫、危なくないよ！だって、どうすればいいのかもう全部分かったから！」

　ドレスの裾を片手でつまみ、無理矢理サイズを調節したハイヒールでぎこちなく走り出したラウラは、何度も転びそうによろけながら、何とかアメイシャの正面までたどり着いた。
「メイシャちゃん！」
　大声で名を呼ぶと、アメイシャはその顔から笑みを消した。
「ラウラ・フラウラ……。私から夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）を奪った小女神（レグナース）……！」
　怨嗟の表情（いろ）にその顔を歪め、アメイシャが杖を振り上げる。
「消えろ！私の代用品（かわり）の夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）！悪夢より紡ぎ出されよ“砲煙弾雨”！」
　杖の先端から黒い泡が吹き出す。それはきな臭い煙を上げながら上空に渦巻いたかと思うと、次の瞬間、無数の銃弾の雨となりラウラの頭上に降り注いだ。
「ラウラーっ！」

見守っていた者達が蒼白になって悲鳴を上げる中、ラウラは声を上げることも恐怖に顔色を変えることもなく、ただ銀の匙杖（シルヴァースプーンワンド）を頭上高くふりかざした。
「夢より紡ぎ出されよ、“祝福の花の雨（フラワーシャワー）”！」
その言葉に呼応するように、ラウラの身を貫こうとしていた銃弾の雨が白銀の光となって弾ける。花火のような眩い閃光の後に現れたのは、まるで月光に照らされた花のように淡く光を宿した色とりどりの花びらだった。
まともな灯りも無いに等しい薄暗がりの中、それ自体がほのかな光を放ちながら降り注ぐ花の雨は、まるで優しい灯火のように辺りを柔らかく照らしていく。ひらひらと舞い降る花あかりの中を、ラウラはゆっくりとアメイシャに歩み寄っていった。そして、いつもと変わらぬ笑みで手を差し伸べる。
「メイシャちゃん、悪夢から抜け出して。戻って来てよ」
だがアメイシャは激しく首を振り、その手を拒んだ。そして己の姿を見せつけるかのように黒泡のドレスの裾をつまみ、乾いた笑い声を上げながら一回転してみせた。
「見ろ、この姿を。私はもうこんなにも醜く歪んでしまった。もう皆と同じ場所へ戻ることなどできはしないのだ」
言いながら、アメイシャはなおも笑う。それはまるで自分自身を嘲笑っているかのような、ひどく悲しい声音だった。
「そんなことない！諦めてしまわないで！ひとりで悪夢を振り払えないなら、私が手伝うから！」
言ってラウラは銀の匙杖（シルヴァースプーンワンド）を振り上げ、叫んだ。
「夢より紡ぎ出されよ！——………………！」
その声は周囲で未だ繰り広げられている悪夢（コシュマァル）との戦闘の音に掻き消され、ほとんどの人間は耳にすることができなかった。だがアメイシャの耳にだけはしっかりと届いていた。
「……何を…………」
アメイシャは目を見開き、困惑した顔でラウラを見つめる。
ラウラの匙杖（スプーンワンド）からふわり、とリボンのように長くゆらめく幾筋もの白銀の光が放たれた。それは風にそよぐようにふわふわと揺れながらアメイシャへと向かっていく。
「何をする気だ……!?」
白銀の光のリボンは、まるで布を織り上げていくように互いに絡まり合い、ゆるやかにアメイシャの身を包み込んでいく。その光に触れるたびに、悪夢（コシュマァル）の黒い泡はぷちぷちと音を立てて弾け、空気に溶けていく。まるで暗闇に光が点っていくように、アメイシャのドレスは黒から白銀へと

染め替えられようとしていた。…………だが……。
「……やめろ！そんな夢、私は望んでいない！君に憐れみをかけられるなど御免だ！私の悪夢を踏みにじるな！」
　アメイシャはその光に抗うように己の身を掻き抱き、悲鳴のように叫んだ。震えるその両腕から再び黒い泡が湧き出し、白銀の光のドレスを再び闇の色に染めていく。
「そんな……ラウラの夢見の力が押されている!?」
　アプリコットが動揺に声を震わせる。
「やっぱり百年に一人の天才なだけあるってことか……。でもこれって、マズくない？」
　焦ったようにそう言いながらも、どうすることもできず立ち尽くすしかないキルシェの目の前で、黒い泡はアメイシャのドレスのみならず、ラウラの杖から伸びる白銀のリボンをも浸蝕し始めていた。初めのうちはじわじわとゆるやかだったその速度は凄まじい勢いで上がっていき、ついには奔流となってラウラめがけて逆流していく。
「ラウラっ！逃げてっ！」
　声を上げるが間に合わず、悪夢（コシュマァル）の黒い泡はすぐにラウラの手元にまで到達した。そしてホースの先から泥水が噴き出すかのように、どっと杖の先端から溢れ出す。ラウラは悲鳴を上げる間もなく黒い泡の塊に呑み込まれた。
「ラウラっ！！」
　そこかしこから悲痛な叫びと絶望の呻きがこぼれる。アメイシャはすっかり闇の色に戻ったドレスの裾をなびかせ、勝ち誇ったように笑った。

　ラウラを呑み込んだ悪夢（コシュマァル）は、まるで巨大な繭か蛹のようにその場にわだかまり、黒い泡を吐き出し続ける。ラウラはその中に閉じ込められ、溺れるようにもがいていた。
(……つめたい。暗い。これが、悪夢……)
　視界は黒い泡に覆われて何も見えず、全身は氷水に浸かってでもいるかのように冷たく冷やされていく。その暗さ、冷たさは、肉体だけでなく心すらじわじわと蝕んでいくようだった。
（どうしよう、私の "夢" が通じない。メイシャちゃんを悪夢から救い出してあげられないよ。どうしたらいいんだろう。私、何か間違ってたのかな？もっと違う方法じゃなきゃダメだったのかな？）
　一度湧き出した不安や疑念は、泡がふくらむように次々とふくれ上がり、ラウラの心を苛む。否定的なことばかりが頭をめぐり、ラウラは為す術もなく瞳に涙をにじませた。
　だがその時、そんなラウラを宥めるかのように、優しい声が闇に響いた。
『いいえ、あなたの考えは間違っていません。ただ、少し過程（プロセス）が足りなかっただけ。絶望の闇に沈んだ者は、すぐには希望を信じることなどできません。何かを信じるということは、とてもエネルギーの要ることですから。まずは彼女が抱えている傷を癒し、心を回復してあげなければ』
　その声は、まるでラウラの頭の中に直接響いているかのようだった。ラウラはすぐにその声の主を悟る。
（シスター・フレーズ。……でも、どうすれば……）
　心の中で問いかけると、ラウラの戸惑いや迷いを読み取ったかのように、諭すような強い声が返ってきた。
『その答えは、既にあなたの中にあります。力を解き放ちなさい、私の夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）。他の誰でもないあなた自身が、その人生の中で悩み苦しんで掴み取ったその力を、今こそ目覚めさせるのです』
（私の中の答え……？メイシャちゃんの傷を癒すもの……。これまでの人生の中で掴み取った、私の力？）
　ラウラの脳裏に、これまで辿ってきた人生が走馬灯（ファンタスマゴリア）のように流れる。浮かんでは消える幾千もの日々の中、一瞬浮かんだある光景に、ラウラはハッと目を見開いた。
(——そうだ。私、知ってた。夢が破れた悲しみや絶望を、私、もう知ってる。忘れずに覚えてる）
　それは、いつかの夕暮れの情景だった。必死に追いかけてきた夢が破れた日、茜色に染まった花びらを見つめながら、ラウラは途方も無い無力感や胸の痛みと静かに戦っていた。過去の思い出として薄れることもなく、まるでその日のままのように鮮やかに生々しく蘇ったその感情に、ラウラの両目から涙が溢れた。その涙は頬を滑り、だが、そのまま泡の中に溶け混じることはなく、まるで水晶の粒のように涙の形を保ったまま、その場

に漂う。
（許せない気持ちも、悔しい気持ちも、分かる。私もあの時は、私の夢を壊した人たちに怒りを覚えたり、恨んだりしたもの。……それから、どうしたんだっけ？私、どうやって立ち直ったんだっけ？）
　ラウラは夢破れた日から今日までの自分を、順を追ってゆっくりと思い出す。
（シスター・フレーズに慰められて、私の紡いだ夢を一番だって言ってくれる人もいるんだって知って、少し心が癒されて……。それから、思い出したんだ。私があの夢を思いついた時のこと。夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）よりもっと素敵な夢……私の紡いだ夢で皆が笑顔になったり、喜びの涙を流してくれるなら、それで私も幸せになれるんだってこと……）
　ラウラの顔にはいつしか笑みが浮かんでいた。泣き笑いの顔で、ラウラは涙を流す。いつの間にかその周りには水晶（クリスタル）のような涙の雫が七粒漂い、淡い光を放ち始めていた。
　それは一つとして同じ色彩（いろ）はなく、皆違う色を宿して輝いている。悲しみを宿したかのような切ない青の光に、絶望を映したかのような深い藍の光、怒りに燃えているかのような赤、怨みにゆらめく紫、心癒されるような緑、喜びに溢れた明るい黄、そして、灯火のようにあたたかく優しい、橙（オレンジ）色の光……。
（……そっか。そういうことなんだね。あの日の悲しみ、絶望、怒り、恨み……何もかも全部、無駄なものなんかじゃなかった。その気持ちを知っている私だから、できることがある。記憶の中にあるそれが、同じように苦しむ誰かを癒す力になるんだね。……ううん、違う。『なる』のを待つんじゃなくて、自分で『する』んだ。私は何一つ、無駄になんかしないよ。今まで覚えた全ての感情、全ての記憶。私の歩んできた人生の全て……きっと、力に変えられる。変えてみせる！）
　ラウラは祈るように両手を組む。その手のひらに、引き寄せられるように七色の涙が集まってくる。それは一つの大きな光となり、プリズムの光のように虹色にきらめいた。

　ラウラを包んでいた黒泡の繭の隙間から、まるで雲間から陽の光が零れ出すように虹色の光が溢れだした。それは見る間に眩さを増していき、黒い泡をゆっくりと溶かし消していく。その中から現れたラウラはまるで、闇色の蛹から七色の光をまとって生まれてきた蝶のようだった。
　その場にいた誰もが皆、呆然とその姿に見入る。暗がりの中でもはっき

りと輝く空織のドレスは、悪夢（コシュマァル）に呑み込まれる前とはまるで違っていた。星の瞬く夜空を映していたはずのドレスは今や、島の誰もが見たことのない景色を映し出している。

　それは、夜明け間際の空に無数の雪が降り注ぐ光景。しかもそれは見慣れた白銀の雪ではなく、陽の光にきらめくクリスタルガラスのようにきらきらと虹色の光を放ちながら降る雪だった。

「何、あの模様……。あんな空、見たことない。一体この島のどこにあんな空模様があるって言うの？」

　呆然と呟くキルシェの背後で、夢術師（レマーギ）の一人が感極まったように涙をながし、膝をつく。

「あれこそ、真の夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）の証……。今現在の空ではなく、未来を暗示する空模様……。あれは、やがてこの島に訪れる数百年に一度の夜明けの光景だ」

　ラウラは閉じていたまぶたを上げ、真っ直ぐにアメイシャを見つめた。アメイシャは怯えたように身を震わせ後ずさる。ラウラはそんなアメイシャへ向け再び手を差し伸べ、唇を開いた。

「ねぇ、メイシャちゃん。私がメイシャちゃんに手を差し出すのは、『憐れみ』なんかじゃないよ。だって、私もその悪夢を知ってるから。苦しいよね。辛いよね。すぐには希望を信じられないよね。でもね、世界がそんな悪夢だけじゃないことも、私はもう知ってるよ」

　それは母が赤子に語りかけるような、優しい、優しい声だった。

「この世界は、全ての夢が叶うような世界じゃない。自分自身のせいだけじゃなくて、他人の都合や運命のせいで夢が壊されることもある。だけどね、きっと誰にも壊せない夢だってあるよ。他人の作った夢、誰かに用意された夢じゃなく、自分自身で描きあげた夢なら。それはきっと、自分が諦めない限りは誰にも壊せない。だから、大丈夫だよ。安心して夢を見ていいんだよ」

　それでもアメイシャは首を横に振る。駄々をこねる子のように、どこか幼げな仕草で懸命に首を振る。

「……無理だ。私にはもう夢など見られない。私の中は空ろだ。もう何もかも失われてしまったのだ」

　強張った顔で訴えるアメイシャに、ラウラは微笑みかけた。

「ねぇ、メイシャちゃん。夢って、破れてしまえばそれでお終いなのかな？もう何の価値もなくなっちゃうものなのかな？メイシャちゃんは『もう何もかも失われた』って言ったけど、私はそうは思わないよ。だって、今のメイシャちゃんには“力”があるはずだから。夢を追う日々の中で、努力して、苦しんで、少しずつ身につけてきた力が確かにあるはずだから。それは自分でもあるかどうか信じられないような種類の力かも知れない。目に見える実力とかじゃなく、感性（センス）とか精神力とかそういう自分でもその存

在に気づけないような力かも知れない。でもきっと、何かの力になってるよ。何一つ生み出さない努力なんて無いよ」
　アメイシャの顔が泣きそうに歪む。
「力、だと？そんなもの、今更もう何の役にも立たないではないか。私は既に夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）の資格を喪失してしまったのだから」
「役に立つか立たないかはメイシャちゃん次第だよ。その力は夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）という夢を叶えることはできなかった。でも、別の新しい夢を叶える力にはなるかも知れない。きっとどんなすごい力だって、メイシャちゃんが諦めてしまえば何も果たせずに朽ちていくだけだよ。でも、そんなのもったいないよ。悲しいよ」
　頬に微笑を刻んだまま、ラウラは切なげに眉を寄せてアメイシャを見つめる。それは夢破れる苦しみや痛みを知ってなお、そこから何かをすくい上げようともがいたラウラがたどり着いた、精一杯の微笑みだった。
　アメイシャは一瞬、その笑みに吸い寄せられるように手を伸ばしかけた。だが、すぐにその手を引っ込め、きつく握り込む。その身を包む黒い泡が、彼女の動揺を表すように激しく音を立てて泡立った。
「嫌、だ……。君に救われるのは嫌だ。どんなに苦しくても、君に救われるくらいなら……っ！」
　アメイシャにとって、ラウラに救われることは『負け』を意味していた。今だけでなくこれまでもずっと、アメイシャは他の誰でもない、ラウラにだけは絶対に負けたくなかった。
　だが、ラウラは静かに首を横に振る。
「ううん、違うよ。メイシャちゃんを救うのは私じゃない。メイシャちゃん自身だよ。今、そんな風に泣いて苦しんでいるメイシャちゃんを救ってあげられるのは、きっと未来のメイシャちゃんだけだから」
　ラウラは世界の全てを見通し、慈しむかのような眼差しで言葉を続ける。
「メイシャちゃんの追ってきた夢の軌跡は、きっとメイシャちゃん自身にしか分からない。メイシャちゃんが今までどれだけ努力して苦しんできたのかは、メイシャちゃんだけしか知らない。たとえどんなに近くにいた人でも、親しい友達でも、決してその全部を知ることはできないよ。だからせめて自分だけはちゃんと覚えていて、愛しんであげなきゃ、一生懸命頑張ってきたこれまでの自分が可哀相だよ。その努力や苦しみを無駄で無意味なだけの思い出にしちゃわないで、何かに生かしてあげようよ。そうすれば、いつかの未来でその日々を振り返った時、自分自身に言ってあげられるよ。『あの時の涙や苦しみは無駄なんかじゃなかった』って。だから、ねぇ、いつまでも悪夢の中でもがかないで、夢を見よう。新しい夢を探そう。夢見ることは無駄になんてならないから。夢（それ）はきっと、お星様みたいに人生を照らしてくれるから」
　差し伸べられたままの小さな手のひらを、アメイシャはじっと見つめた。

在りし日の記憶が、その脳裏に蘇ってくる。

　小女神宮（レグナスコラ）で出会ったばかりの頃、アメイシャはラウラのことを本気で馬鹿にし、見下していた。

『君の夢術（レマギア）は欠点だらけだな。そんなことでは到底、夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）になど選ばれまい』

　アメイシャにとって、同世代の小女神（レグナース）は全て夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）を狙う敵（ライバル）でしかなかった。だからその欠点をつつき、夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）を目指す気など失くしてしまうほど心を傷つけることに何のためらいも抱いてはいなかった。落ちこぼれで欠点だらけのラウラはそんなアメイシャにとって恰好の標的（ターゲット）に見えたのだが……。

『そっかぁ……欠点だらけかぁ。じゃあ、その欠点を一個一個克服していかなきゃ、だね！』

　アメイシャの言葉に、初めのうちこそ落ち込んだように項垂れていたラウラだったが、次の瞬間にはもう前向きなことを言い笑っていた。予想外の反応に面食らいながらも、アメイシャは攻撃の手をゆるめなかった。

『なぜそんな風に笑っていられる？私は君に夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）の可能性が無いと言ったのだぞ』

『え？だって、今はそうでも将来は分からないでしょ？欠点があるってことは、それを乗り越えれば、その分確実に成長（レベルアップ）できるってことだし。自分のやるべきことがはっきり分かってるってことだから、何て言うか、えっと……『便利』な気がするけどな』

　そう言ってへらへらと笑ったラウラを、アメイシャはただ白けた顔で見るばかりだった。

(『便利』って、この子、馬鹿なのか？)

『分かっていないな。欠点をいくら克服したところで、所詮やっと人並みになれるだけだ。他人と同じ才能で選ばれるわけなどない』

　止めを刺すくらいのつもりで言い放った言葉は、だがラウラにきょとんとした顔で受け止められただけだった。ラウラは不思議そうな表情で何事か考え込んだ後、ぱっと顔を輝かせた。その後告げられた言葉は、完全にアメイシャの理解を超えていた。

『そっか。他人に言われたからって、自分でもダメだと思い込んですぐに欠点扱いしちゃうのって、良くないよね。もしかしたらその中に、思ってもみなかったスッゴイ長所に化ける“何か”があるかもしれないのに』

　その時アメイシャは、自分の言った台詞を思いもよらなかった方向へ曲解されたことよりも、ラウラのその言葉の内容の方にすっかり気を取られていた。
『何を言っているのだ、君は。他人からけなされたことが長所に化けるだと？そんなこと、あるものか』
『え？あるものかも何も、普通にあることだよね？アヒルの子としてはみにくくて、周りから馬鹿にされてばかりだったヒナが、大きくなったら他のヒナたちよりずっと美しい白鳥になった、みたいなこと』
　間髪入れずにあっさりとそう返され、アメイシャは絶句した。すぐには言い返す言葉も見つからず、アメイシャは、今の今までただの馬鹿だと思っていた相手の顔をまじまじと凝視することしかできなかった。
（この子は、もしかしたら……我々とは全く違う次元で物事を視ているのかもしれない）
　ただ幼く考えなしなだけだと思っていた小女神（レグナース）が、アメイシャにはその時、得体の知れない化け物のように見えた。
　その時からアメイシャは、密かにラウラのことを畏れていた。だが、そんな畏れを抱いていることすら認めたくなくて、アメイシャは徹底的にラウラを拒み、ことあるごとにわざと傷つけるような言葉ばかりぶつけてきた……つもりだった。
（なのに君は、私の悪意にさえ気づかない。出会った頃と変わらぬまま、こうして私に手を差し伸べて……）
　差し伸べられた手のひらを見つめたまま、アメイシャは覚悟を決めたように深く溜め息をついた。出会って以来、何度も何度も拒んできたその手のひらに、アメイシャは初めて自らの意思で触れる。想像していた以上に小さく、頼りなく、けれどひどくあたたかな手のひらだった。
（……ずっと知っていた。君が、私が決して持ちえぬ“何か”を持っていることを。だからこそ、私は君にだけは絶対に負けたくなかった）
　負けたくないと、頑ななまでに思うのは、心のどこかで『この子には負けるかもしれない』という思いがあったからだ。アメイシャは今まで必死に目を背けてきたその心に向き合い、受け入れる。
（今更なことだな。私はもう、とっくの昔に君に負けていたのだ。それを認めたくなくて、君という存在を拒絶してきただけのことだ）
　次の瞬間、つないだ手を伝って虹色の光がなだれ込んできた。その光に包まれて、アメイシャの身を覆っていた悪夢（コシュマァル）の黒い泡は洗い流されるように消えていく。そうして悪夢が消え去った後、アメイシャの姿はそれまでと全く違うものに変わっていた。
　黒い泡のドレスは金銀の星のラメを散りばめた夜空の色のドレスに、そして足には透明な革靴、耳にはフクシアの耳飾り、頭上には涙珠宝冠（ティアドロップ・クラウン）。それはアメイシャが身につけるはずだった、夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）の衣裳だった。

「……“夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）になったアメイシャ・アメシス” か」
　アメイシャは己の姿を見下ろし、小さく呟く。それは悪夢（コシュマァル）に呑み込まれる直前にラウラがアメイシャにかけた夢術（レマギア）だった。
「なぜ、私にこの夢術（レマギア）をかけた？」
　それが単なる憐れみによる施しなどでないことは既に知っている。だがそうでなければ何なのか、ラウラの真意がどうにもつかめず、アメイシャは問いかけた。
「え？だって、運命とか他人の都合とか、そんな自分ではどうにもならないことで夢が失われるなんて、他人事だとしてもやっぱり許せないと思ったから。元々、夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）が一人じゃなきゃいけないなんて規則（ルール）はないはずだし、小女神（レグナース）じゃなくなったって夢見の力を失うわけじゃないんだもん。皆でなっちゃえばいいんじゃないのかなって思ったんだよね」
　ラウラはあっさりととんでもないことを言い放つ。
「それに、そもそも皆それぞれ夢術（レマギア）の個性も得意分野（ジャンル）も違うんだもん。無理に取捨選択することばっかり考えるんじゃなくて、全部を上手く生かせる方法を考えてみてもいいんじゃないかな。この世に万能（パーフェクト）な人なんていないから、ひとりだけじゃ足りない部分がきっとあるはずだし、それを皆で補い合っていけば、今までに誰も紡げなかったようなすごい夢が紡げるかもしれないでしょ？それこそ、夢追いの祭のフィナーレにふさわしいって思うんだけどな」
　あまりにもラウラらしい言葉に、アメイシャは一瞬沈黙した後、思わず下を向いて吹きだしていた。あまりにも珍しいその笑いに、逆にラウラの方がきょとんとした顔になる。
「……まったく君は本当に、常識に囚われないにもほどがあるな」
「え？え？何、それ。私、何かヘンなこと言ったかな？」
　ラウラはなぜ笑われているのか分かっていないというようにうろたえる。アメイシャはそんなラウラから顔を背け、なおも笑い続けた。その頬を涙が一滴、そっと流れ落ちる。
「本当に……そんなだから私は、君が『嫌い』なんだ」
　いつも繰り返してきた言葉を、アメイシャはラウラに聞こえないように小さく告げる。だがその声音は言葉の内容とはうらはらに、ひどく優しくあたたかい響きをしていた。

「えっと……一体、何がどうなってそうなったの？」

　アメイシャの手を引き戻ってきたラウラを、キルシェが疑問符（クエスチョン・マーク）だらけの顔で迎える。

「うん。だから、メイシャちゃんを悪夢（コシュマァル）から取り戻したんだよ」

「それは分かってるけど、あんた一体何したのよ？皆があんなに苦戦してる悪夢（コシュマァル）をあんな風に消しちゃうなんて」

「うん、だからね、悪夢（コシュマァル）を消すにはそれに負けないくらい素敵な“夢”を紡げばいいってことだよ。不安には安心を、絶望には希望を、ストレスには癒しを与えれば消えるでしょう？だから悪夢には“夢”をぶつければいいんだよ」

　言いながらラウラはアメイシャとつないだままの手をキルシェとアプリコットの方へ差し出す。

「キルシェちゃんとアプリちゃんも手伝って。この島の全ての悪夢（コシュマァル）を夢で上書きするには、私とメイシャちゃんだけじゃ足りないから。一緒に夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）になって夢追いの祭のフィナーレをやり直そう」

　頷いて手を重ねようとし、キルシェはふと引っかかりを覚えて動きを止めた。

「『一緒に夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）になって』……ってあんた、まさか私とアプリまで夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）にするつもり!?」

「うん。だって私とメイシャちゃんだけじゃ不公平だし」

「そういう問題じゃないでしょ！って言うか、夢術（レマギア）に協力するだけならわざわざ夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）になる必要なんてないじゃない！」

「必要はないかもしれないけど、その方が楽しいと思うし。楽しい夢を紡ぐには、まず夢の紡ぎ手が思いきり楽しまないとダメだもん。キルシェちゃんはなりたくないの？夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）に」

　キルシェはぐっと詰まった後、くしゃくしゃと髪をかき混ぜ叫ぶ。

「ああ、もうっ！あんたには負けたわ。なりたいに決まってるでしょ。ずっと憧れてたんだから！」

「アプリちゃんは？」

「なりたくないと言ったら嘘になるけど……いいのかしら？前代未聞よ。夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）が一度に四人なんて」

「良いではないか。前例などいつかは破られるものだ」

　ためらうアプリコットにアメイシャが笑いかける。キルシェとアプリコットは顔を見合わせた。

「なんか……アメイシャ、感じが変わった？」

「ええ。何だか雰囲気が柔らかくなったみたい」

「べつに何も変わってはいない。ただ、今まで囚われていた些細なこだわ

りを一つ捨てただけだ」
　言ってアメイシャは眩しいものでも見るようにラウラを見つめる。ラウラは四人の手を無理矢理一つに重ね、空いた方の手で杖を振り上げた。
「じゃあ行くよ！夢より紡ぎ出されよ！“夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）になったキルシェ・キルク及びアプリコット・アプフェル”！」
　重ねられた手を中心に七色の光を帯びた風が巻き起こり、キルシェとアプリコットを一瞬で夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）の姿に変える。
　四人の夢見の娘（フィーユ・レヴァリム）は右手を高く掲げ、四本の銀の匙杖（シルヴァースプーンワンド）の先を重ね合わせた。杖の先で光が渦巻く。キルシェ、アプリコット、アメイシャの杖の先から立ち上る三本の光の帯を、ラウラの杖の先から出る七色の光が一つにまとめ、より合わせ、一本の巨大で眩い光の束に変え、高く高く上っていく。
「夢より紡ぎ出されよ！」
　ラウラは微笑みを浮かべて叫ぶ。
「“空飛ぶ島（ラピュータ）の浮かぶ天空（あめ）の海を泳ぐ、カンブリアの海洋生物（いきもの）、そしてその中に漂う思い出の幻影（ファンタズム）”！」
　ラウラが叫び終わるのと同時に四人の真上で光がはじけた。それは島全体を覆いつくすような巨大な閃光だった。誰もが眩しさに視力を奪われる。そして光が止み皆が視力を取り戻したその時、誰もが言葉を失った。
　広場は一瞬のうちにすっかり変貌を遂げていた。周囲を取り囲んでいた悪夢（コシュマァル）たちは跡形もなく消え去り、それどころか地面も会場も谷の建物も何もかもが消え、そこにはただ果てもなく広がる星の海が在った。彼方には無数の灯りを点したラピュータが浮かび、間近には三葉虫やオパビニアなどカンブリア紀を生きた海洋生物たちがゆったりと泳ぎ回る。そして……。
「うわ！これ、昔なくした超合金ロボじゃん！何でこんな所に浮いてんだよ!?」
「あれ!?あのアノマロカリスの背中にいるの、俺のひいばあちゃんだ！何で!?」
　リモンとカリュオンが不思議そうに何もない空間を指差す。その周りで他の島民たちも、口々に何か騒ぎながら辺りを見渡している。
「これは……“思い出の走馬灯（ファンタスマゴリア）”の変化形（アレンジ・バージョン）だね。その人の記憶の中にある、今は失くした懐かしく愛しいものたちが幻影として辺りに投影されているんだ」
　ビルネは他の人間には見えない懐かしい何かを見つめながら、そんな考察を口にする。フィグは汗を拭い、その場にへたり込みながら口を開いた。
「天の海に、ラピュータに、カンブリアの生物に、思い出……。つまりこれは選考会で四人が紡いだ夢の『全部盛り』ってことか。さすが、ラウラら

しいと言えばラウラらしい発想だが……なんて混沌（カオス）な光景なんだ」
　呆れたようなフィグの隣でビルネが笑う。
「でも、今まで見た夢追いの祭の中でも最高のフィナーレだと思うけどな。皆、さっきまでの戦いも忘れて夢中だし」
「そうかぁ？」
　懐疑的な声とは対照的に、フィグの目は優しく細められていた。
　その視線の先には昔なくしたオモチャや絵本、憧れていたヒーローや小さい頃に紡いだことのある数々の夢晶体（レクリュスタルム）に混じり、一緒に時狂いの森を冒険した日の幼いラウラとフィグの姿があった。
　幼いラウラとフィグは当時と変わらぬ無邪気な笑顔で、周りのオモチャや夢晶体（レクリュスタルム）と戯れている。見つめていると、記憶とともにその頃の気持ちまでもが自然と蘇ってくる。夢を見ることに何の不安もなかった頃のこと、自分の力や可能性を何の疑問もなく信じていられた頃の気持ちが……。
　フィグはにじんでくる涙もそのままに、忘れかけていた愛しい思い出たちを飽きることなく見つめ続けた。

　その夜、ラウラは夢の中でシスター・フレーズと再会した。
　彼女はラウラに己の正体を明かし、島の悪夢が未だ収まってはいないことと、この悪夢を終わらせるためにラウラが果たすべき真の役割を告げる。
　それは淡い恋心を支えに新しい夢へ向け歩み出そうとしていたラウラにとって、あまりにも重く、過酷な役割だった。